

平安京右京六条二坊三・六町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇七―一四

平安京右京六条二坊三・六町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京六条二坊三・六町跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび道路拡幅事業に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成 20 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | | |
|----|---------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| 1 | 遺 跡 名 | 平安京右京六条二坊三・六町跡 |
| 2 | 調査所在地 | 京都市下京区西七条赤社町～西七条御前田町 |
| 3 | 委 託 者 | 国土交通省近畿地方整備局 京都国道事務所長 見坂茂範 |
| 4 | 調査期間 | 2007年8月21日～2007年12月21日 |
| 5 | 調査面積 | 1,500 m ² (1区:660 m ² 、2区840 m ²) |
| 6 | 調査担当者 | 小檜山一良・能芝 勉・尾藤徳行・布川豊治 |
| 7 | 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「山ノ内」「壬生」「西京極」・「島原」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI(ただし、単位(m)を省略した) |
| 9 | 使用標高 | T.P.:東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点(一級基準点)を使用した。 |
| 11 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 | 遺構番号 | 調査区(1区・2区)ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、建物・小径については別に番号を付した。 |
| 13 | 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 | 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子が担当したが、一部は調査担当者が撮影した。 |
| 15 | 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 | 自然遺物分析 | 北野信彦・竜子正彦 |
| 17 | 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 18 | 本書作成 | 小檜山一良・能芝 勉・尾藤徳行・布川豊治。遺物のトレースは山口眞が協力した。 |
| 19 | 執筆分担 | 小檜山一良:1、2、3-(1)・(2)・(4)、5、尾藤徳行:3-(3)、能芝 勉:4 |
| 20 | 編集・調整 | 児玉光世・近藤章子・山口 眞 |
| 21 | 調査現場で西山良平氏(京都大学)にご教示を得た。記して謝意を申し上げます。 | |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 調査地の位置と環境	3
(1) 位置と歴史的環境	3
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	9
(1) 基本層序	9
(2) 遺構の概要	9
(3) 1区の遺構	13
(4) 2区の遺構	19
4. 遺 物	33
(1) 出土遺物の概要	33
(2) 1区の出土遺物	33
(3) 2区の出土遺物	34
5. ま と め	45
(1) 右京六条二坊三・六町の変遷	45
(2) 小径に関して	48

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1面全景（西から）
		2	1区第2面全景（西から）
図版2	遺構	1	1区建物1（西から）
		2	1区溝9・39、通路B（西から）
		3	1区溝67・83、通路A（北から）
図版3	遺構	1	2区第1面全景（西から）
		2	2区第2面全景（南西から）
図版4	遺構	1	2区建物2（北東から）

	2	2区建物3 (北から)
図版5 遺構	1	2区建物4 (北から)
	2	2区建物6 (東から)
図版6 遺構	1	2区建物1 (西から)
	2	2区建物5 (西から)
	3	2区建物7 (西から)
	4	2区溝58・60、通路C (東から)
図版7 遺構	1	2区溝201、通路D (北東から)
	2	2区土坑67 (西から)
	3	2区柱穴68 (南東から)
図版8 遺構	1	2区柱穴97 (南から)
	2	2区柱穴124 (北西から)
	3	2区柱穴128 (東から)
	4	2区柱穴74 (北から)
図版9 遺物		土器類
図版10 遺物		土器類・軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図 (1:2,500)	1
図2	調査区配置図 (1:1,000)	2
図3	1区調査前全景 (北西から)	3
図4	2区調査前全景 (西から)	3
図5	1区作業風景	3
図6	2区作業風景	3
図7	周辺既往調査位置図 (1:5,000)	5
図8	1区東壁および南壁断面図 (1:80)	10
図9	2区東壁断面図 (1:80)	11
図10	2区南壁断面図 (1:80)	12
図11	1区第1面遺構平面図 (1:200)	14
図12	1区第2面遺構平面図 (1:200)	15
図13	1区第3面遺構平面図 (1:200)	16
図14	1区建物1実測図 (1:100)	17

図 15	1区遺構断面図（1：50）	18
図 16	2区第1面遺構平面図（1：200）	20
図 17	2区第2面遺構平面図（1：200）	21
図 18	2区第3面遺構平面図（1：200）	22
図 19	2区建物1実測図（1：100）	23
図 20	2区建物2実測図（1：100）	24
図 21	2区建物3実測図（1：100）	25
図 22	2区建物4実測図（1：100）	26
図 23	2区建物5実測図（1：100）	27
図 24	2区建物6実測図（1：100）	28
図 25	2区建物7実測図（1：100）	29
図 26	2区土坑 67 実測図（1：20）	29
図 27	2区土坑 125 実測図（1：20）	29
図 28	2区溝 58・60 断面図（1：50）	30
図 29	2区埋納遺構実測図（1：20）	31
図 30	1区出土遺物実測図（1：4）	34
図 31	2区流路 209 出土遺物実測図（1：4）	34
図 32	2区柱穴 68 出土遺物実測図（1：4）、銭貨拓影（1：1）	35
図 33	2区柱穴 74 出土遺物実測図（1：4）	35
図 34	2区柱穴 97 出土遺物実測図（1：4）	36
図 35	2区土坑 102 出土遺物実測図（1：4）	37
図 36	2区柱穴 124 出土遺物実測図（1：4）	38
図 37	2区柱穴 128 出土遺物実測図（1：4）	39
図 38	2区落込み 56 出土遺物実測図（1：4）	40
図 39	2区土坑 67 出土遺物実測図（1：4）	41
図 40	2区整地層・その他の遺構出土遺物実測図（1：4）、銭貨拓影（1：1）	42
図 41	2区柱穴 206 出土遺物実測図（1：4）	43
図 42	2区柱穴 126 出土柱根実測図（1：4）	44
図 43	2区第2面変遷図（1：500）	46
図 44	四行八門内における調査区（1：1,000）	47
図 45	平安京内小径検出地点	50

表 目 次

表 1	周辺既往調査一覧表	6
表 2	遺構概要表	9
表 3	遺物概要表	33
表 4	平安京内小径検出地点一覧表	51

平安京右京六条二坊三・六町跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

この調査は、平成19年度五条大宮拡幅事業に伴う調査である。調査地は、京都市下京区西七条赤社町～西七条御前田町に位置し、平安京右京六条二坊三町および六町にあたる。

当地に国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所により、国道9号線の拡幅工事が計画された。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課による試掘調査の結果、発掘調査の指導された対象地区を、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて、発掘調査を実施することとなった。平成18年度から実施している第1次・第2次調査に引き続く第3次調査である。

これまで周辺では、多くの調査が行われ平安時代前期を中心とした多くの遺構・遺物が検出されている。これらを踏まえ、今回の調査では、平安時代の宅地班給や土地利用の実態を明らかにすることを主な目的とした。

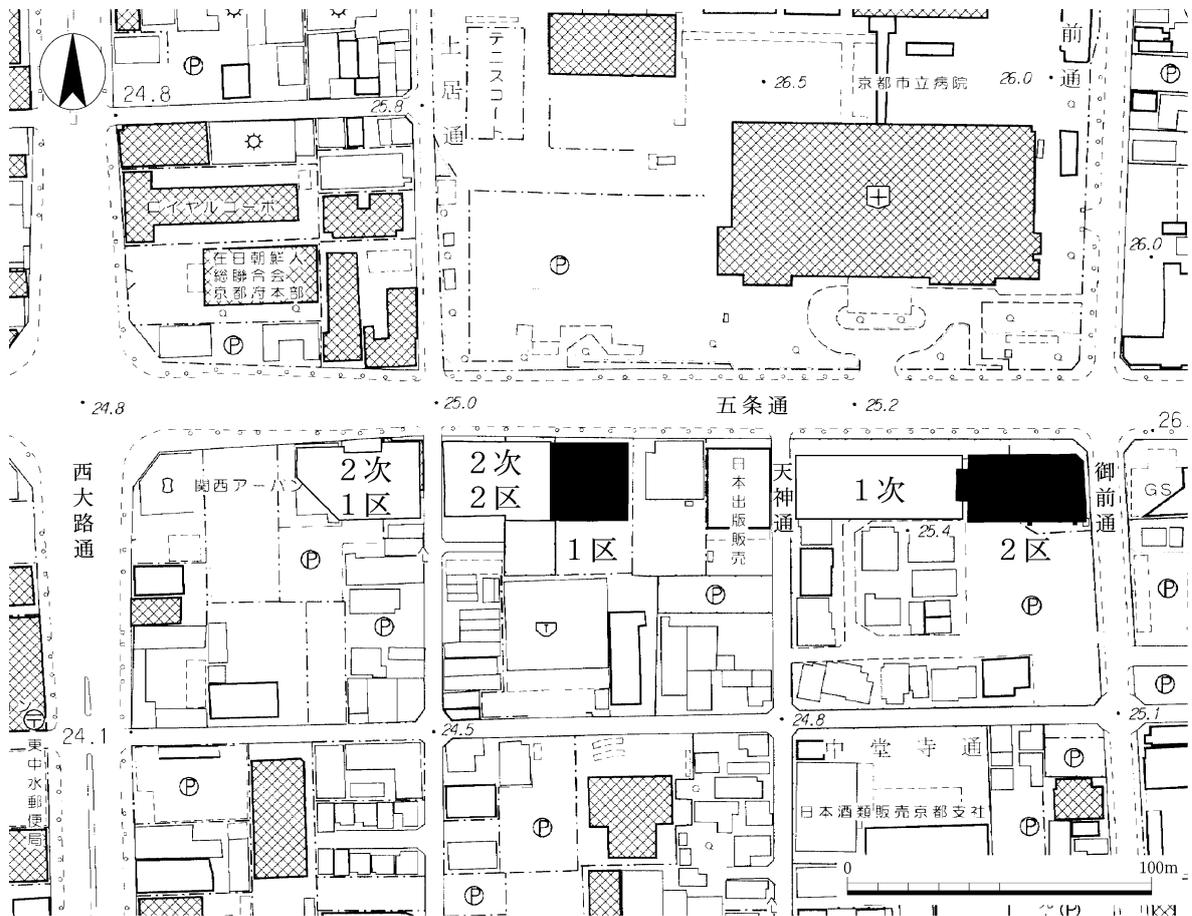


図1 調査位置図 (1 : 2,500)

(2) 調査の経過

調査は、先に1区として六町北部中央東寄りにあたる地点に東西約25m・南北約26m、面積約660㎡の調査区を設定した。続いて2区は、三町北部東寄りにあたる御前通の西側に、北東隅を欠く東西約39m・南北約23mの調査区を設定し、調査の最後に西側および南側に6箇所の拡張をした結果、面積は約840㎡で、全体では約1,500㎡となった。

始めに、重機を使用して遺構面まで掘下げを行い、排土はダンプトラックで順次場外の土置き場に搬出した。その後、人力での遺構調査を開始した。

検出した主な遺構には、1区では、平安時代前期の掘立柱建物・通路（小径）・土坑・溝などがある。また、古墳時代以前とみられる土坑群や溝なども検出した。2区では、平安時代前期の掘立柱建物・通路（小径）・土坑・溝・整地土層などがある。また、古墳時代とみられる自然流路も検出した。

平安時代前期の三町および六町内の建物跡や小径に関連する遺構などが良好な状態で検出できたことから、調査期間中の11月10日に市民を対象とした現地説明会を開催し、約250名の参加があった。

これらの遺構の写真撮影・実測などの記録作業を調査の進行にあわせて行い、下層遺構の有無と堆積状況の確認をするため、1・2区ともに調査区の東・南壁沿いに断割を行い、土層断面図を作成し、その後埋戻しを行った。

また、2区西側の第1次調査地との間に設定した拡張区では、想定通りに南北方向の溝を検出した。最後に、調査区南に隣接する住宅展示場前のフェンスおよび通路を復旧し、全ての作業を終了した。

註

- 1) 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年

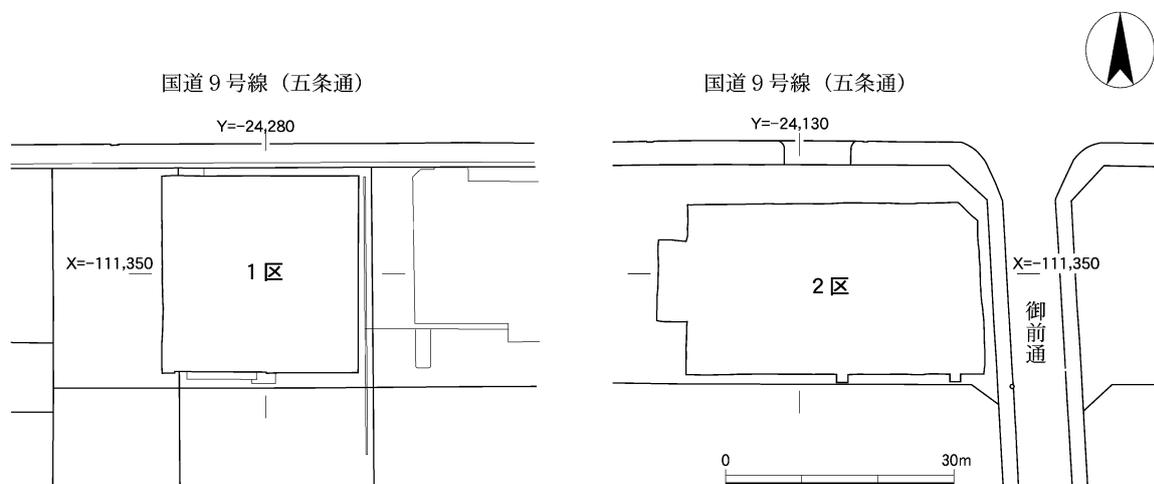


図2 調査区配置図（1：1,000）

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と歴史的環境

調査地は、2区が右京六条二坊三町の北東部、1区が六町の北部東側にあたる。ともに敷地外の北側に六条坊門小路が推定され、三町の東は西大宮大路、六町の東は西靱負小路にあたる。四行八門制では三町の東一・二行、北二・三門にあたり、六町では、東二行北二・三門にあたる。

周辺には、北西方向 100 m に、おもに弥生時代の土坑群を検出した西院遺跡、南方 130 m には、方形周溝墓 2 基を検出した衣田町遺跡などの弥生時代から古墳時代の遺跡がある。『拾芥抄』西京図によると、三・六町は「号山荘」とされているが、実態はよく解っていない。

また、南には平安京の官営市場である西市跡が位置する。

平安時代中期以降、右京域が湿潤な土地環境のため衰退するに従って、当地周辺もさびれていったとみられる。中世になると、この辺り一帯は西七条村と呼ばれ、江戸時代には村内を丹波街道が貫き同街道沿いに集落が形成され、当地一帯は耕作地としての利用がなされていた。



図3 1区調査前全景（北西から）



図4 2区調査前全景（西から）



図5 1区作業風景



図6 2区作業風景

(2) 既往の調査

調査地周辺では、これまでに発掘調査・試掘調査・立会調査が実施され、その成果が報告されている。それらの調査成果を表1にまとめ、図7に調査地点を記した。ここでは本調査地周辺の概要を述べる。

三町では、2006年の第1次調査となった発掘調査(12)がある。平安時代前期の2時期にわたる園池や溝、柱穴などを検出した。南北溝は三町の中心にあたることから、二分の一町の宅地割りに関連する遺構の可能性がある。立会調査(13)では、同前期の柱穴や溝も検出されている。

六町内での発掘調査例には、2007年の第2次調査となった発掘調査(21)がある。1区では、平安時代前期の掘立柱建物や町内通路側溝、西堀川小路関連遺構が検出された。2区では、同時期の掘立柱建物や井戸、町内通路が検出された。これらは宅地内の建物の配置を推測できる資料である。1989年の試掘調査(19)では平安時代前期の井戸が検出され、1989年の立会調査(18、44)では、平安時代の遺物の出土が報告されている。

二坊内では他の町でも、発掘調査を始めとした多くの調査の成果が報告されている。北東側の二町では、京都市立病院敷地内で発掘調査(10)が実施されている。弥生時代の溝、平安時代前期の掘立柱建物4棟・井戸・溝・土坑、後期の土坑など、さらに中世の建物・溝などが検出されている。平安時代前期の西韮負小路東築地に近い位置や町の中央付近で建物が検出されていることから、一町規模の占有も考えられている。南側の四町では、立会調査(14)で、平安時代前期から後期の流れ堆積などが検出されている。また、試掘調査(15)では、平安時代後期の六条大路の北側溝を検出している。五町では、立会調査(17)で平安時代の遺物包含層を確認している。北隣の七町では、調査(22・23)で西堀川小路の流路堆積や平安時代中期の遺物などが検出されている。北西側の十町では、発掘調査(28)により、平安時代前期から中期の掘立柱建物6棟以上、柵列2条などと、鎌倉時代から室町時代の小溝群を検出している。十町の中央寄りに平安時代前期から中期まで、複数の建物が配置されていたことが判明している。西隣に位置する十一町では、立会調査(30)で溝状遺構が検出されている。また、南西側の十二町では、立会調査(31)で野寺小路の両側溝、路面整地土が検出されている。このように当地周辺は、平安時代前期の遺構が比較的良好に遺存している地域である。

参考文献

- 小澤嘉三『西院の歴史』西院の歴史編集委員会 1983年
- 杉山信三「平安京右京の湿地について」『古代文化』40-9 古代学協会 1988年
- 『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻 平凡社 1979年
- 財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店 1994年
- 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年

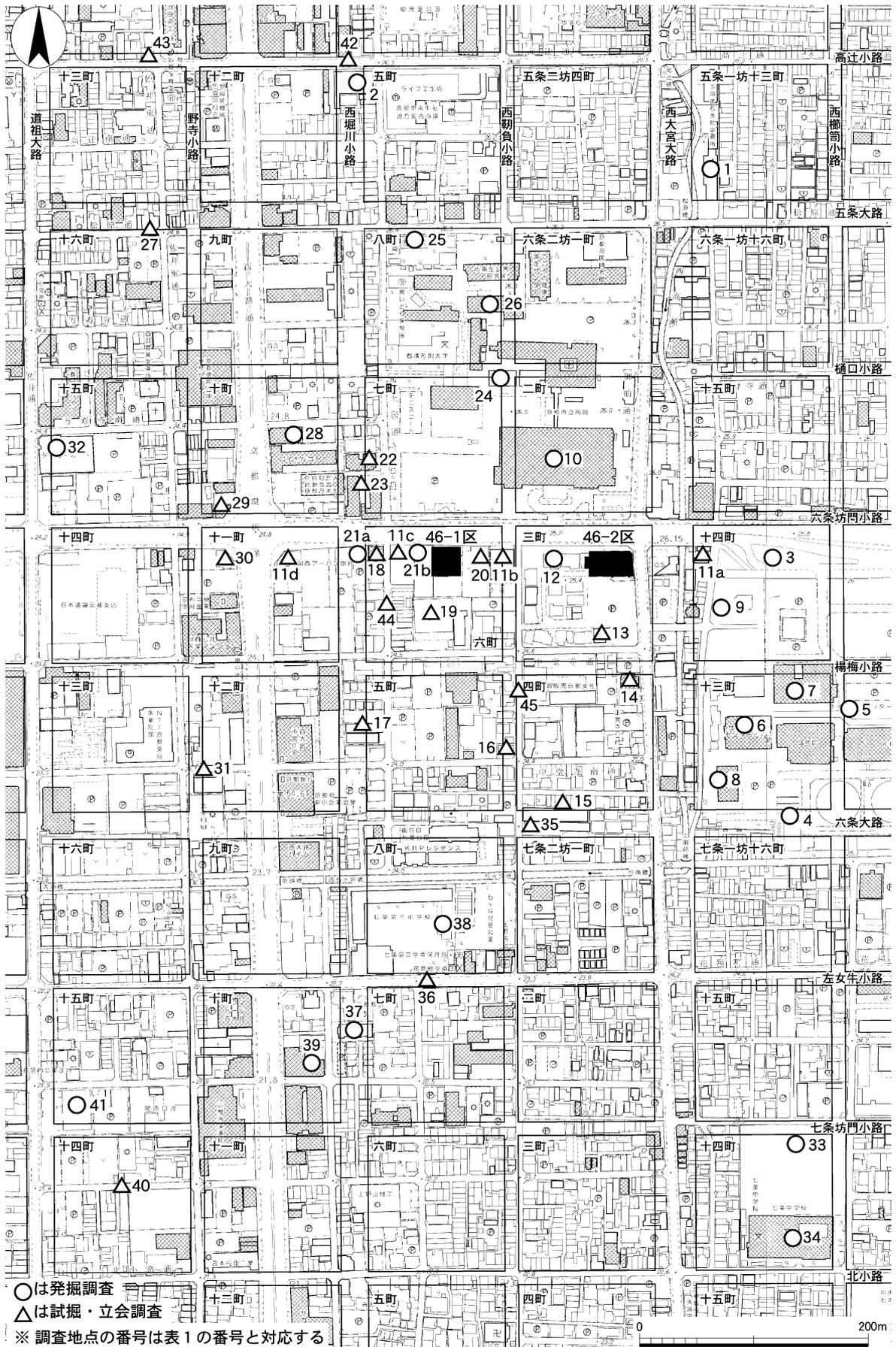


図7 周辺既往調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺既往調査一覧表

番号	遺跡名	調査方法	所在地	調査期間	遺構	文献
1	右京五条一坊十三町	発掘	中京区壬生下溝町45	1987.07.01～07.14	平安時代～鎌倉時代の土坑6基。江戸時代の溝、土坑5基。	1
2	右京五条二坊五町	発掘	中京区壬生西桜町8-9	1980.10.15～10.31	平安時代の西堀川・東側溝・路面・築地跡・内溝、木棺墓、土坑、土坑墓。近世の旧耕土。	2
3	右京六条一坊十一・十四町	発掘	下京区中堂寺粟田町地内	1995.04.10～12.01	縄文時代～古墳時代以前の河跡。古墳時代の河跡。平安時代の建物、柵、井戸、土坑、河跡。鎌倉時代の西櫛司小路西側溝？。近世以降の暗渠、競馬場濠。	3
4	右京六条一坊十二・十三町、七条一坊十六町	発掘	下京区中堂寺粟田町1	1989.03.28～06.07	弥生時代～古墳時代の湿地(河川跡を含む)。平安時代の柱跡2基。平安時代後期の六条大路北側溝1条。江戸時代の土取穴、暗渠。	4
5	右京六条一坊十二・十三町	発掘	下京区中堂寺粟田町1	1989.07.20～1990.05.30	平安時代の柱穴、井戸。平安時代～近代の溝、土坑。12町-7群の建物跡、13町-3群の建物跡、井戸、西櫛司小路東側溝、門跡2ヶ所。	5
6	右京六条一坊十三町	発掘	下京区中堂寺粟田町1	1991.11.18～1992.03.07	縄文時代～弥生時代の旧流路跡。平安時代の掘立柱建物8棟、柵、溝、井戸、湿地状遺構。近世以降の暗渠、土坑。	6
7	右京六条一坊十三・十四町	発掘	下京区中堂寺粟田町1	1992.07.13～1993.01.14	縄文時代～弥生時代の河跡。古墳時代の河跡。平安時代の掘立柱建物、楊梅小路路面・側溝、土坑、門跡？。	7
8	右京六条一坊十三町	発掘	下京区中堂寺粟田町地内	1996.09.02～12.28	平安時代の建物、溝、池。近世以降の暗渠、土取穴、競馬場濠。	8
9	右京六条一坊十四町	発掘	下京区中堂寺粟田町地内	1994.08.29～1995.02.24	古墳時代～平安時代後期の河川旧流路。平安時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、柵。近世以降の土坑、溝。	9
10	右京六条二坊二町	発掘	中京区壬生東高田町1-2(京都市立病院)	1988.10.07～1989.01.10	(1区) 弥生時代の溝。平安時代前期の掘立柱建物3棟、南北溝2条。中世の建物1棟以上、東西溝1条。(2区) 平安時代前期の掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑1基。	10
11a	右京六条一坊十四町	試掘	下京区中堂寺粟田町	2006.09.20	地表下1.45mで地山の黄褐色砂礫。この砂礫層直上まで現代盛土層。	11
11b	右京六条二坊三町	試掘	下京区西七条赤社町25	2006.09.20	地表下1.6mまで既存建物の基礎。	11
11c	右京六条二坊六町	試掘	下京区西七条東御前田町16	2006.09.21	平安時代の東西溝、土器埋納遺構(柱穴か)、中世の南北溝。	11
11d	右京六条二坊十一町	試掘	右京区西院南高田町	2006.09.21	地表下1.6mまで既存建物の影響により削平。	11
12	右京六条二坊三町	発掘	下京区西七条東御前田町	2006.11.28～2007.03.19	平安時代の池、溝、土坑、柱穴。室町時代～江戸時代の耕作溝。近代の耕作溝。	12
13	右京六条二坊三町	立会	下京区西七条東御前田町24、赤社町20-1	2006.06.30	地表下1.18mで平安時代中期の包含層、土師器皿。1.35mで黄褐色砂礫の流れ堆積。1.6mで暗灰黄色砂礫の地山。	13
14	右京六条二坊四町	立会	下京区西七条赤社町16	1987.06.11	地表下0.75mで平安時代前期～後期の流れ堆積。	14
15	右京六条二坊四町	試掘	下京区西七条東御前田町50	1989.05.19	地表下0.8で平安時代後期の六条大路北側溝。	15
16	右京六条二坊五町	試掘	下京区西七条東御前田町13・14～御前田町31	1988.02.15	(1区) 地表下0.8mで浅いシルト層が全域に堆積。平安時代前期の土師器、瓦。	16
17	右京六条二坊五町	立会	下京区西七条東御前田町6-4	1990.07.19	No.1 地点第3・4層は平安時代の可能性あり。	17
18	右京六条二坊六町	立会	下京区西七条御前田町14-1・2	1981.03.26	地表下0.6mで落込み。平安時代の布目平瓦片、土師微片。	18
19	右京六条二坊六町	試掘	下京区西七条御前田町24-2	1989.02.13	地表下1.5mで平安時代前期の井戸。曲物内には黒色土器。湿地状堆積。	15
20	右京六条二坊六町	試掘	下京区西七条御前田町22	1985.10.04	地表下0.9mで遺物包含層(第1・2層)。	19
21a 21b	右京六条二坊六町・十一町	発掘	右京区西院南高田町、下京区西七条東御前田町	2007.03.27～08.03	平安時代前期の新旧2時期の建物配置、溝・土坑・井戸、西堀川小路の東築地・東側溝・道路・西堀川。室町～江戸時代の耕作溝。	20
22	右京六条二坊七町	立会	中京区壬生東高田町4-1	1989.09.18	平安時代中期の土師器(第4・5層)、湿地状堆積。	15

番号	遺跡名	調査方法	所在地	調査期間	遺構	文献
23	右京六条二坊七町	試掘	中京区壬生東高田町2	1990.05.21	西堀川の流路堆積。砂礫上面に平安時代の遺物。近世の土師器。	17
24	右京六条二坊七町	発掘	中京区壬生東高田町1-2(京都市立病院)	1979.02.01～03.15	平安時代の溝3条(西鞠負小路側溝)、土坑1基。近世の土坑4基。	21
25	右京六条二坊八町	発掘	中京区壬生東高田町1-2(朱七保育所)	1978.11.28～12.02	中世の遺物包含層。	21
26	右京六条二坊八町	発掘	中京区壬生東高田町(公害センター)	1976.11.20～12.27	古墳時代の溝。平安時代中期?の包含層。室町時代の溝2条(西鞠負小路側溝?)、柱穴。近世の包含層。	21
27	右京六条二坊九町・十六町	立会	右京区松原通、佐井通～西大路通地内	1998.10.19～11.12	地表下0.67～1.38m佐井川の堆積層。平安時代前期の鉢片。	22
28	右京六条二坊十町	発掘	右京区西院高田町34	1987.05.22～07.02	古墳時代の流路。平安時代前期～中期の掘立柱建物6棟以上、柵列2条、土坑、溝状遺構。鎌倉時代～室町時代の南北・東西小溝群。	23
29	右京六条二坊十町	立会	右京区西院南高田町34	1987.06.19	地表下0.3mで土坑2基。	14
30	右京六条二坊十一町	立会	右京区西院南高田町3	1982.03.02	溝状遺構。淡黄灰色砂泥層より須恵器片。	24
31	右京六条二坊十二町	立会	右京区西院中水町21-1、22-1	1997.04.10～04.21	野寺小路の両側溝、路面整地土、2時期。平安時代後期の土師器、須恵器、布目瓦の細片。	25
32	右京六条二坊十五町	発掘	右京区西院寿町	1988.05.23～06.14	平安時代の道祖大路東築地・東側溝・道祖川。中世の溝、河川。	26
33	右京七条一坊十四町	発掘	下京区西七条御領町32(七条中学校)	1980.08.26～10.20	弥生時代の方形周溝墓、溝。平安時代の建物、井戸3基、溝。	27
34	右京七条一坊十四町	発掘	下京区西七条御領町32(七条中学校)	1997.09.24～1998.03.09	平安時代の掘立柱建物、井戸、柵列、溝、土壇。	28
35	右京七条一坊一町	試掘	下京区西七条東御前田町49	1981.07.21	地表下0.6mで平安時代中期の包含層	24
36	右京七条二坊二・七・十町	立会	下京区西七条掛越町～東石ヶ坪町	1998.09.02～11.19	地表下0.4mで平安時代の包含層。土師器、須恵器。0.9mで流れ堆積。	22
37	右京七条二坊七町	発掘	下京区西七条西石ヶ坪町40	1983.04.20～05.14	平安時代中期～後期の溝3条(西堀川小路東側溝・東側築地内溝)、柱穴、土坑。鎌倉時代～室町時代の溝、包含層、土坑。近代～現代の溝、柱穴、杭列、土坑。	29
38	右京七条二坊八町	発掘	下京区西七条西石ヶ坪町5(七条第三小学校)	1981.09.04～09.21	平安時代中期の東西溝1条。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉、瓦。砂礫の流れ堆積、古墳時代の土師器、須恵器。	30
39	右京七条二坊十町	発掘	下京区西七条比輪田町5-1、5-2、5-3	1990.07.06～09.20	飛鳥時代～奈良時代の自然流路。平安時代前期の掘立柱建物1棟、柵列2条、土坑、土坑状遺構、井戸跡。平安時代後期～鎌倉時代前期の東西・南北方向小溝群。鎌倉時代～室町時代の東西小溝群。桃山時代～江戸時代の東西小溝群。	31
40	右京七条二坊十四町	立会	下京区西七条名倉町～比輪田町地先	1997.03.11～03.27	地表下0.3mで平安時代中期の包含層。土師器、須恵器、黒色土器。0.9mで湿地状堆積。	32
41	右京七条二坊十五町	発掘	下京区西七条名倉町14・15、比輪田町16	1988.05.10～07.27	古墳時代の河川1条。平安時代の掘立柱建物6棟、柵列1条、井戸1基、溝2条、土坑、ピット、河川1条。中世以降の溝多数。	33
42	右京五条・六条二坊	立会	右京区西院高田町地先～中京区壬生東高田町地先	1981.06.18～1982.03.31	平安時代以前の溝状遺構。平安時代の側溝(西鞠負小路西・西堀川小路東)、土坑状遺構。平安時代前期～後期の西堀川小路、西堀川。	34
43	右京五条・六条二坊	立会	右京区西院矢掛町30地内～高田町地内	1982.04.13～07.13	(A区) 弥生時代中期の包含層(竪穴住居跡?)。(C2区) 平安時代以降の道祖川流路。	35
44	右京六条二坊	立会	下京区西七条東御前田町	1984.12.08～12.25	平安時代の遺物包含層。	36
45	右京六条・七条二坊	立会	右京区西院高田町24地先～下京区西七条北輪田町9地先	1983.06.07～07.18	平安時代の井戸。平安時代～鎌倉時代の溝。近代の溝。	37
46	右京六条二坊三町・六町	発掘	下京区西七条赤社町、西七条御前田町	2007.08.21～12.21	平安時代前期の建物8棟、一町内を四行八門制で区分する東西・南北小径、建物跡から土器埋納を多数確認。建物は10世紀初頭に廃絶。	本報告

文献(表1 周辺既往調査一覧表)

- 1 本 弥八郎「平安京右京五条一坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 2 堀内明博「平安京右京五条二坊」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 3 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 4 長宗繁一「平安京右京六・七条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 長宗繁一「平安京右京六条一坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 6 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 7 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 8 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 9 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10 網 伸也「平安京右京六条二坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 11 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 12 小椋山一良『平安京右京六条二坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 13 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 2007年
- 14 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
- 15 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年
- 16 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
- 17 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 18 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
- 19 「調査一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
- 20 小椋山一良・布川豊治・能芝 勉・尾藤徳行『平安京右京六条二坊六・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 21 『史料京都の歴史 第2巻考古』平凡社 1983年
- 22 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
- 23 堀内明博「平安京右京六条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 24 「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
- 25 尾藤徳行・吉本健吾「右京六条二坊十二・十三町」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
- 26 吉崎 伸「平安京右京六条二坊2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 27 財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店 1994年
- 28 桜井みどり「平安京右京七条一坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 29 平田 泰・丸川義広「右京七条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
- 30 前田義明「右京七条二坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 31 堀内明博「平安京右京七条二坊」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 32 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
- 33 菅田 薫「平安京右京七条二坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 34 百瀬正恒「右京五条二坊・六条二坊」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 35 百瀬正恒「右京五条二坊・六条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年

3. 遺 構

(1) 基本層序

1区は、地表下約0.8mまで現代の整地・盛土層で、盛土下に約0.2mの近世以降の耕作土層がある。耕土下は基本的に褐色砂泥の地山となる。2区は、地表下約1.2mまでが現代の整地・盛土層で、下に約0.2mの近世以降の耕作土層がある。その直下の第1層は、平安時代末期から鎌倉時代初頭とみられる整地層が堆積する。整地層下は多くの部分で地山となるが、南東部では平安時代前期の落込み56があり、黄灰色から黒褐色の砂泥を主体とする落込み埋土が堆積する。落込み56の下は、古墳時代後期のオリーブ褐色から黄褐色の粗砂を主体とする流路堆積となる。1・2区ともに地山層の標高は約24.1mであった。

(2) 遺構の概要

各時代の遺構の多くは、近世以降の耕作土層直下で検出した。検出した主な遺構は平安時代前期の掘立柱建物・溝・土坑・落込みなどである。それ以外には、古墳時代と推定される溝・土坑などがあり、他には江戸時代以降の耕作に関連する溝などがあった。中には近代以降のものもあるが、出土遺物が江戸時代に限定できるものを遺構として調査した。

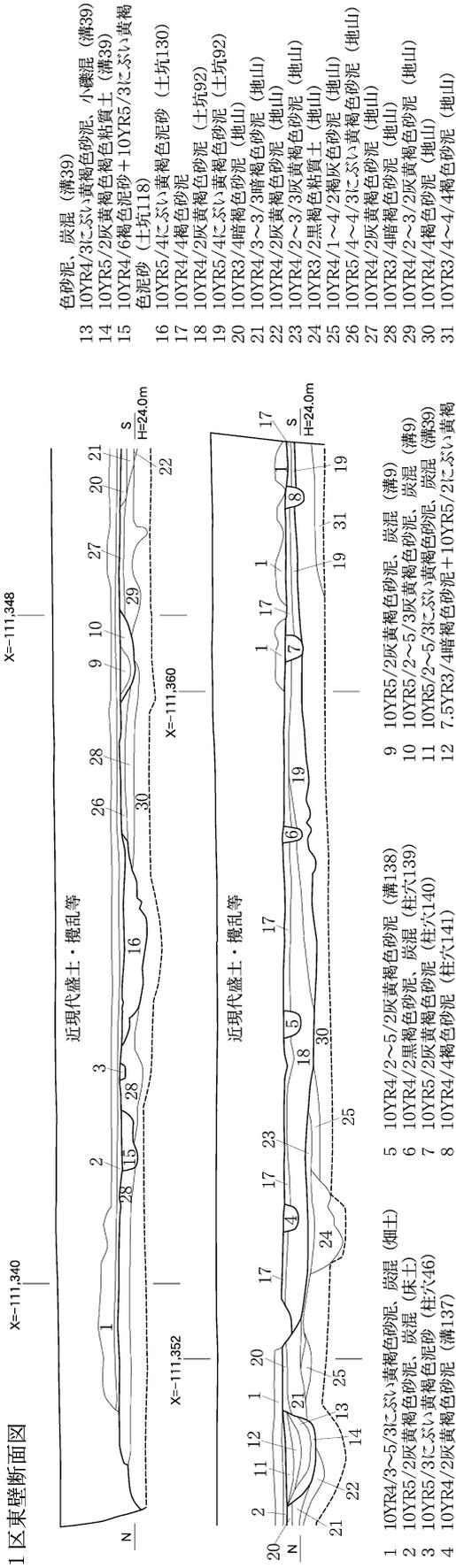
これらの遺構は、同一の面で検出したが都合上、江戸時代（第1面）、平安時代（第2面）、古墳時代以前（第3面）に分けて調査を実施した。

検出した遺構について、1区と2区に分けて記述する。

表2 遺構概要表

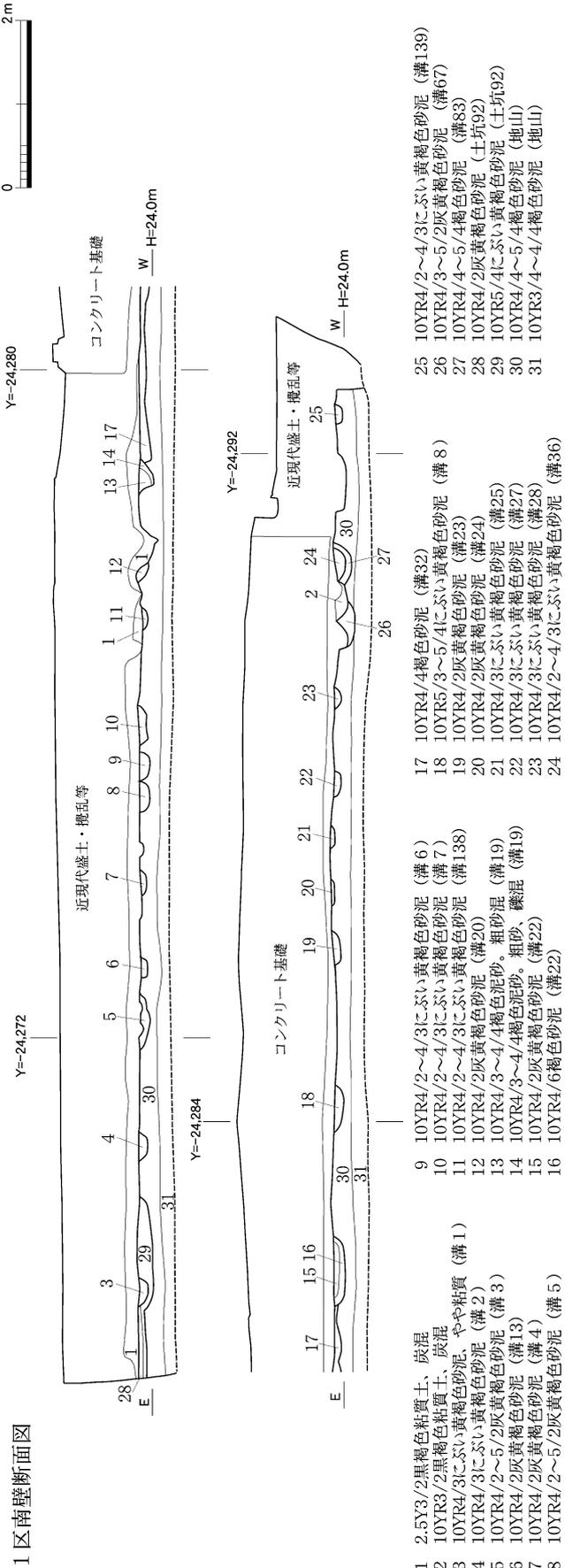
時 代	遺 構		備 考
江戸時代	1区	溝1～3・8など	耕作に関連する溝
	2区	溝5・7・10・15・18など	耕作に関連する溝
平安時代末期～ 鎌倉時代初頭	2区	整地層	
平安時代前期	1区	掘立柱建物1、溝9・39・67、土坑57、通路A・Bなど	
	2区	掘立柱建物1～7、溝57・58・60・61・203、通路C・D、土坑53・67・102・125、落込み56など	
古墳時代	1区	溝37、土坑94～134	
	2区	流路209	
弥生時代	1区	土坑92	

1 区東壁断面図



- 13 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、炭泥 (溝39)
- 14 10YR5/2灰黄褐色粘質土 (溝39)
- 15 10YR4/6褐色泥砂+10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 (土坑118)
- 16 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 (土坑130)
- 17 10YR4/4褐色砂泥
- 18 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (土坑92)
- 19 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (土坑92)
- 20 10YR3/4暗褐色砂泥 (地山)
- 21 10YR4/3~3/3暗褐色砂泥 (地山)
- 22 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (地山)
- 23 10YR4/2~3/3灰黄褐色砂泥 (地山)
- 24 10YR3/2黒褐色粘質土 (地山)
- 25 10YR4/1~4/2褐色砂泥 (地山)
- 26 10YR5/4~4/3にぶい黄褐色砂泥 (地山)
- 27 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (地山)
- 28 10YR3/4暗褐色砂泥 (地山)
- 29 10YR4/2~3/2灰黄褐色砂泥 (地山)
- 30 10YR4/4褐色砂泥 (地山)
- 31 10YR3/4~4/4褐色砂泥 (地山)

1 区南壁断面図

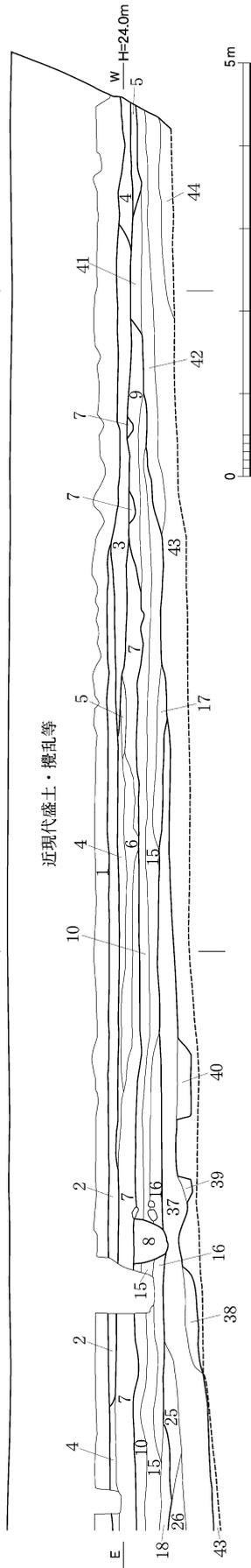


- 1 10YR4/3~5/3にぶい黄褐色砂泥、炭泥 (細土)
- 2 10YR5/2灰黄褐色砂泥、炭泥 (床土)
- 3 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 (柱穴46)
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (溝137)
- 5 10YR4/2~5/2灰黄褐色砂泥 (溝138)
- 6 10YR4/2黒褐色砂泥、炭泥 (柱穴139)
- 7 10YR5/2~5/3にぶい黄褐色砂泥、炭泥 (溝9)
- 8 10YR4/4褐色砂泥 (柱穴141)
- 9 10YR5/2灰黄褐色砂泥、炭泥 (溝9)
- 10 10YR5/2~5/3灰黄褐色砂泥、炭泥 (溝9)
- 11 10YR5/2~5/3にぶい黄褐色砂泥、炭泥 (溝39)
- 12 7.5YR3/4暗褐色砂泥+10YR5/2にぶい黄褐色砂泥
- 13 10YR4/4褐色砂泥 (溝32)
- 14 10YR4/2~4/3にぶい黄褐色砂泥 (溝8)
- 15 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (溝23)
- 16 10YR4/6褐色砂泥 (溝22)
- 17 10YR4/4褐色砂泥 (溝32)
- 18 10YR5/3~5/4にぶい黄褐色砂泥 (溝8)
- 19 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (溝23)
- 20 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (溝24)
- 21 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (溝25)
- 22 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (溝27)
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (溝28)
- 24 10YR4/2~4/3にぶい黄褐色砂泥 (溝36)
- 25 10YR4/2~4/3にぶい黄褐色砂泥 (溝139)
- 26 10YR4/3~5/2灰黄褐色砂泥 (溝67)
- 27 10YR4/4~5/4褐色砂泥 (溝83)
- 28 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (土坑92)
- 29 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (土坑92)
- 30 10YR4/4~5/4褐色砂泥 (地山)
- 31 10YR3/4~4/4褐色砂泥 (地山)

図 8 1 区東壁および南壁断面図 (1 : 80)

Y=24,144

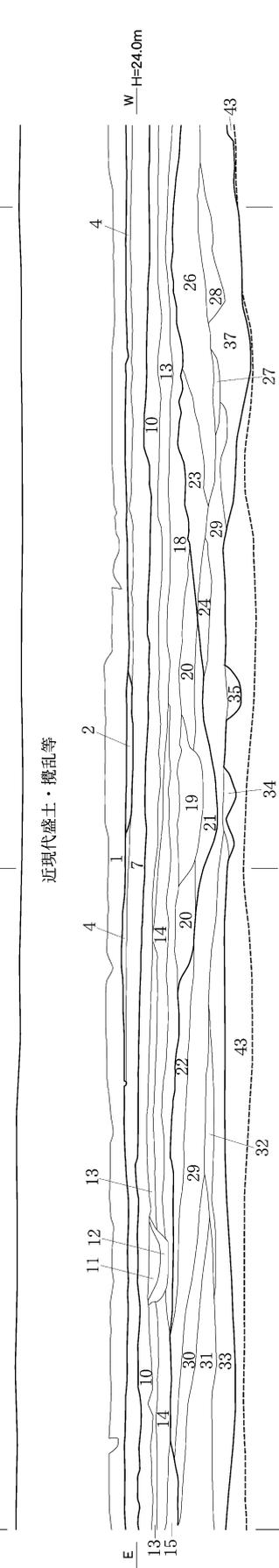
Y=24,152



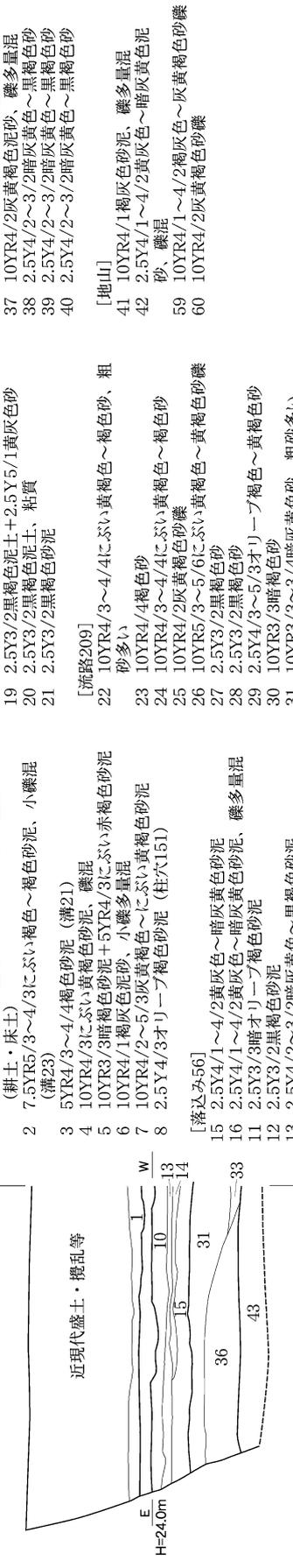
Y=24,120

Y=24,128

Y=24,136



Y=24,120



近現代盛土・攪乱等

近現代盛土・攪乱等

近現代盛土・攪乱等

- 1 5Y3/1~4/1オリーブ黒色~灰色泥土、10YR4/3灰黄褐色泥砂+10YR2/3黒褐色泥砂(耕土・床土)
- 2 7.5YR5/3~4/3にぶい褐色~褐色砂泥、小礫混(溝23)
- 3 5YR4/3~4/4褐色砂泥(溝21)
- 4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫混
- 5 10YR3/3暗褐色泥砂+5YR4/3にぶい赤褐色砂泥
- 6 10YR4/1褐色泥砂、小礫多量混
- 7 10YR4/2~5/3灰黄褐色~にぶい黄褐色砂泥(柱穴151)
- 8 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥(柱穴151)
- 15 2.5Y4/1~4/2黄灰色~暗灰黄色砂泥
- 16 2.5Y4/1~4/2黄灰色~暗灰黄色砂泥、礫多量混
- 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 12 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 13 2.5Y4/2~3/2暗灰黄色~黒褐色砂泥
- 14 2.5Y4/1黄灰色砂泥
- 15 2.5Y4/1~4/2黄灰色~暗灰黄色砂
- 16 10YR3/3暗褐色砂
- 17 10YR3/3暗褐色砂
- 18 2.5Y4/1~3/1黄灰色~黒褐色砂泥
- 19 2.5Y3/2里褐色泥土+2.5Y5/1黄灰色砂
- 20 2.5Y3/2黒褐色泥土、粘質
- 21 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 22 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色~褐色砂、粗砂多
- 23 10YR4/4褐色砂
- 24 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色~褐色砂
- 25 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 26 10YR5/3~5/6にぶい黄褐色~黄褐色砂泥
- 27 2.5Y3/2黒褐色砂
- 28 2.5Y3/2黒褐色砂
- 29 2.5Y4/3~5/3オリーブ褐色~黄褐色砂
- 30 10YR3/3暗褐色砂
- 31 10YR3/3~3/4暗灰黄色砂、粗砂多
- 32 2.5Y4/1黄灰色砂
- 33 10YR4/2灰黄褐色砂
- 34 2.5Y3/2黒褐色砂
- 35 2.5Y3/2黒褐色砂
- 36 7.5YR3/3褐色砂、礫多量混
- 37 10YR4/2灰黄褐色泥砂、礫多量混
- 38 2.5Y4/2~3/2暗灰黄色~黒褐色砂
- 39 2.5Y4/2~3/2暗灰黄色~黒褐色砂
- 40 2.5Y4/2~3/2暗灰黄色~黒褐色砂
- 41 10YR4/1褐灰色砂泥、礫多量混
- 42 2.5Y4/1~4/2黄灰色~暗灰黄色砂、礫混
- 59 10YR4/1~4/2褐灰色~灰黄褐色砂泥
- 60 10YR4/2灰黄褐色砂泥

【流路209】

【地山】

図 10 2区南壁断面図(1:80)

(3) 1 区の遺構

各時代の遺構は、いずれも耕作土層直下の地山上面で検出した。検出した主な遺構には平安時代前期の掘立柱建物・溝・土坑などがある。それ以外には、古墳時代と推定される溝・土坑、江戸時代の耕作関連の溝などである。

第 1 面の遺構 (図 11、図版 1)

江戸時代の遺構には、溝 1～3・8 などの耕作溝がある。幅 0.5～1.1 m、深さ 0.1～0.2 m、南北約 26 m におよぶ溝 1～3 など南北方向の溝が多い。南北溝は 1.6～1.8 m 間隔、東西溝は 2.5～3.0 m 間隔である。埋土はにぶい黄褐色砂泥が主体である。各溝からは平安時代から江戸時代の遺物の小片が出土した。

第 2 面の遺構 (図 12、図版 1・2)

平安時代前期の遺構には、掘立柱建物・東西方向および南北方向の溝・通路・土坑などがある。

建物 1 (図 14、図版 2) 調査区南西部で検出した掘立柱建物である。東西 2 間 (5.2 m)、南北 2 間以上 (4.3 m 以上) の南北棟である。柱穴掘形は径 0.5～0.7 m の円形で、深さは約 0.3 m ある。梁行方向の柱間は 2.6 m ある。建物の南部は調査区外の南側に延びる。建物の南北軸線は、北で東に約 2 度振っている。

溝 9 (図版 2) 調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅 0.9～1.6 m、深さ 0.1～0.2 m ある。東西約 22 m にわたって検出した。埋土は灰黄褐色砂泥が主体である。検出した位置は、北二・三門境に当たる。9 世紀中頃から後半の遺物が出土した。

溝 39 (図版 2) 調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅 1.0～1.7 m、深さ 0.1～0.4 m、東西約 22 m にわたって検出した。埋土はにぶい黄褐色砂泥が主体である。溝 9 の約 3.5 m 南側を並行する。9 世紀中頃から後半の出土遺物がある。

溝 67 (図版 2) 調査区西端で検出した南北方向の溝である。幅 0.4～0.6 m、深さ 0.1～0.2 m、南北約 17 m にわたって検出した。埋土は灰褐色泥土が主体である。溝 9・39 の西端で接続する。西側の 2 次調査で検出している南北溝 44 と並行する。

溝 83 (図版 2) 溝 67 の西側約 0.1 m に位置する南北方向の溝である。幅 0.5 m、深さ 0.2 m、南北約 3.5 m にわたって検出した。埋土は灰黄褐色泥土が主体である。溝 67 を掘り直したものと考えられる。

通路 B (図版 2) 調査区中央で検出した東西方向の溝 9 と溝 39 に挟まれた箇所であり、門境に位置することから通路とした。両溝の心々間は 3.2～3.4 m、通路幅は 2.1～2.4 m ある。上部は削平されている。

通路 A (図版 2) 調査区西端で検出した南北方向の溝 67 の西側箇所である。2 次調査の溝 44 の東側部分にあたる。両溝の心々間は 2.8～3.2 m、通路幅は 2.1～2.4 m ある。上部は削平さ

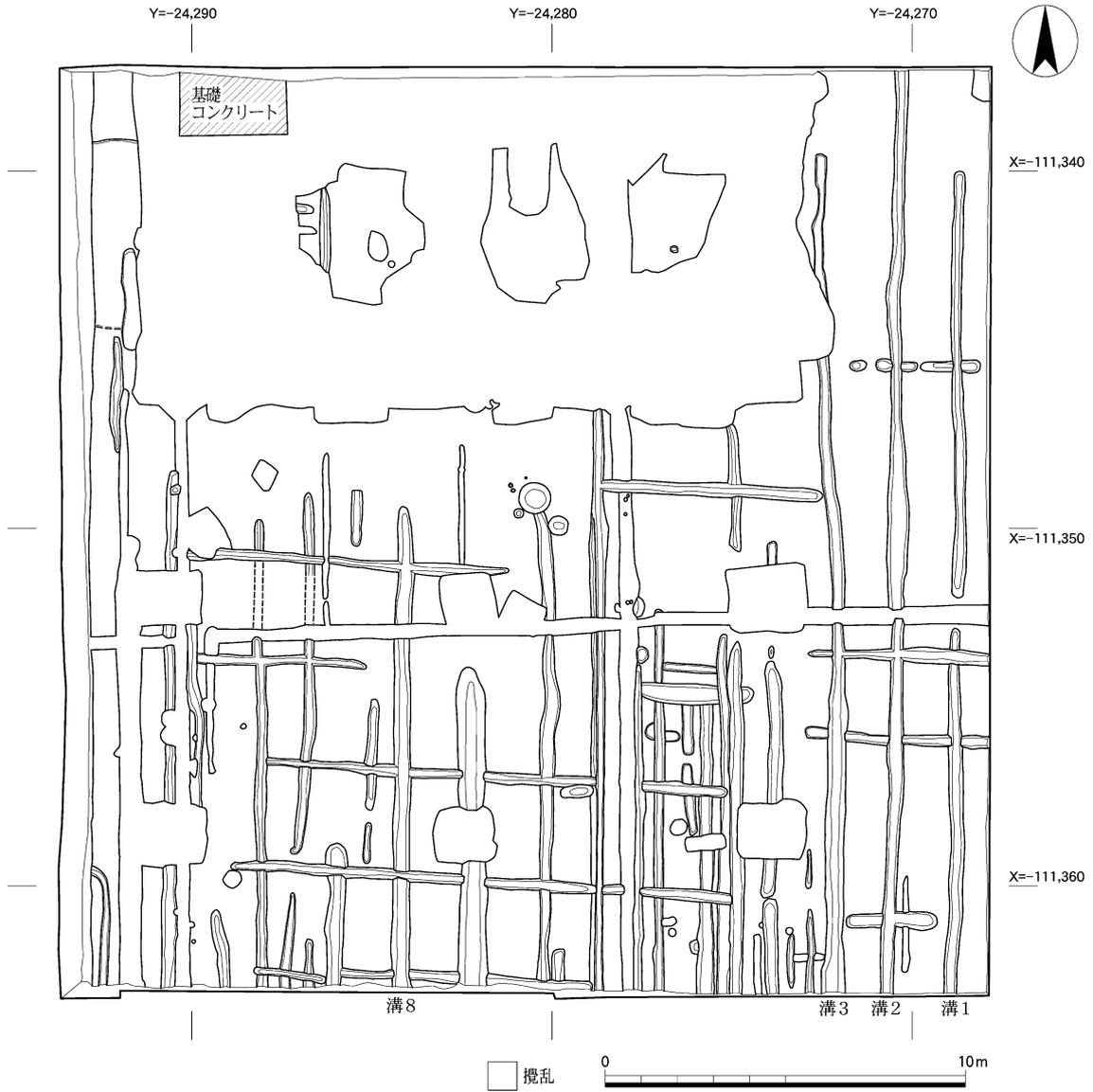


図 11 1区第1面遺構平面図（1：200）

平安京右京六条二坊六町

東三行 ← → 東二行

Y=-24,290

Y=-24,280

Y=-24,270

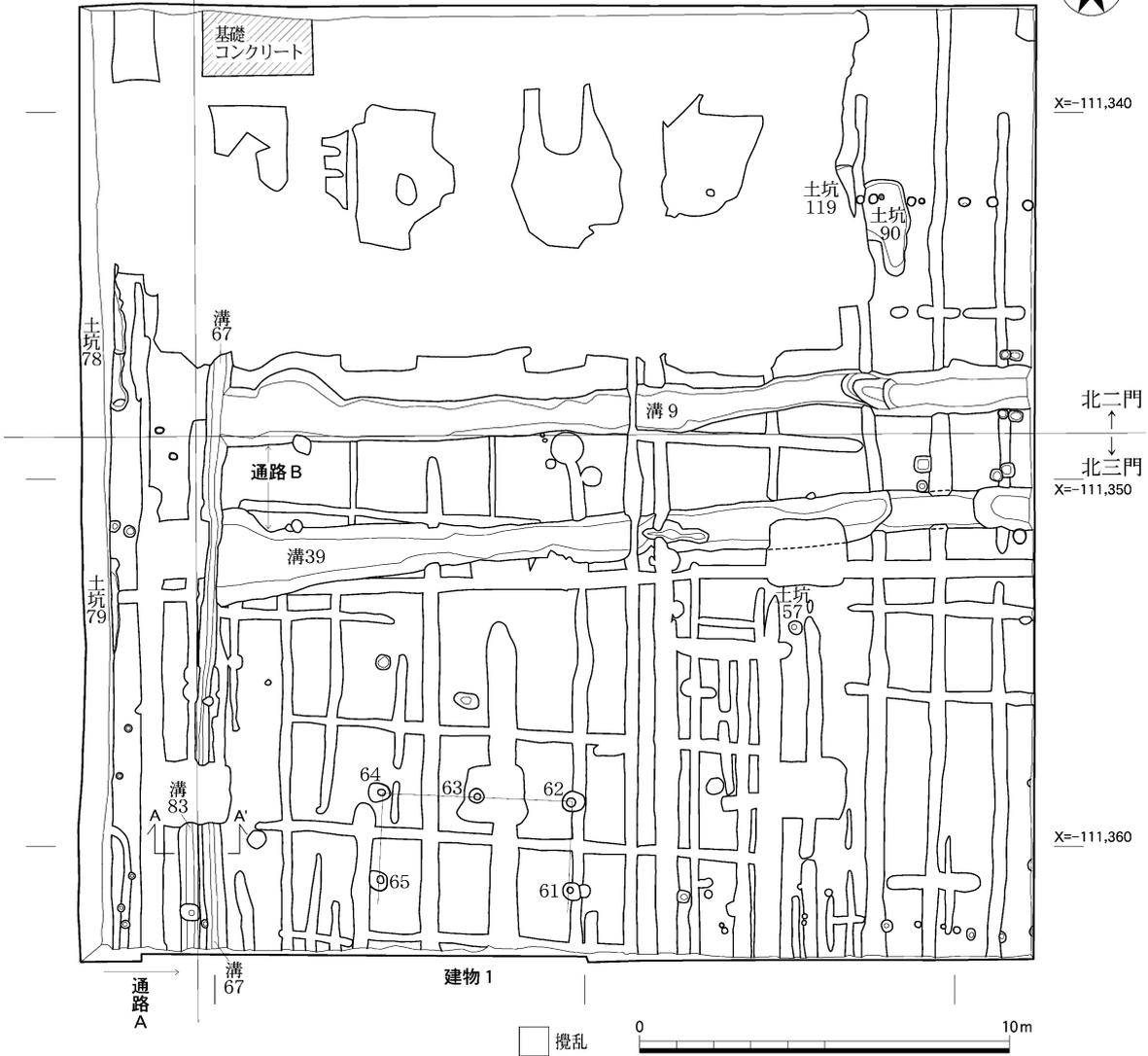


図 12 1区第2面遺構平面図 (1 : 200)

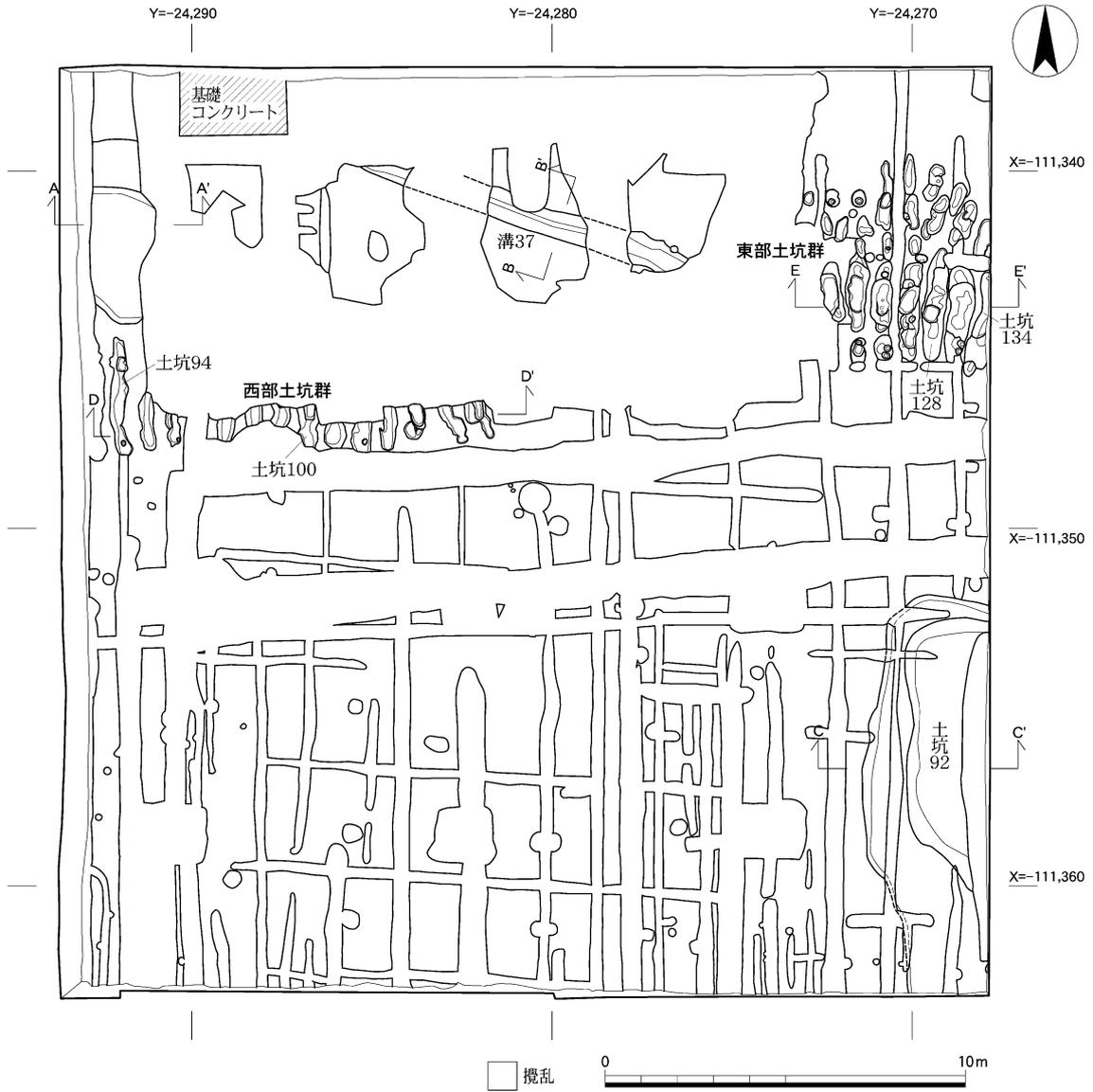


図13 1区第3面遺構平面図（1：200）

れている。

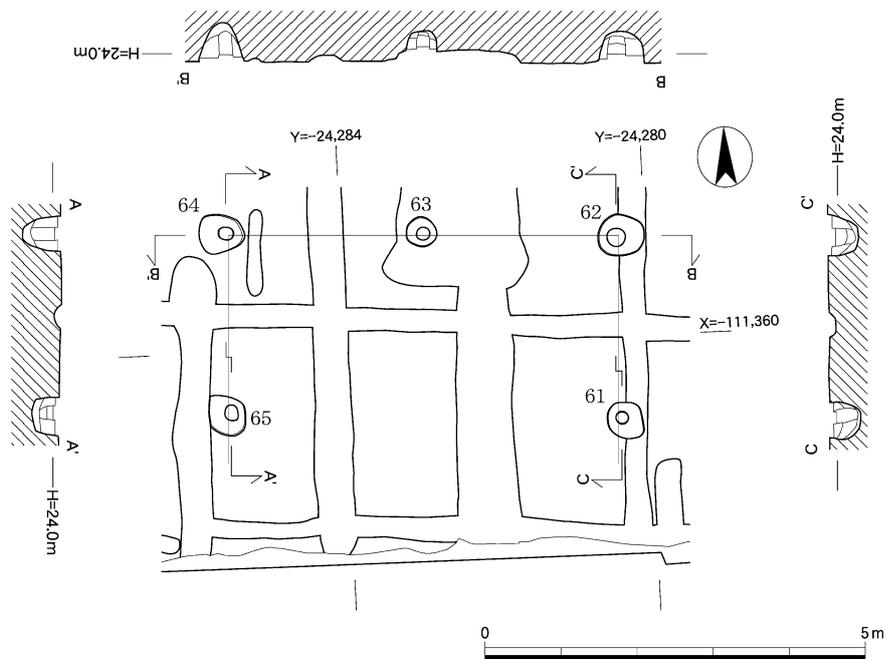
土坑 78 調査区の西端で検出した。南北 3.6 m、東西 0.5 m、深さ 0.3 mある。埋土は暗灰黄色粘質砂泥が主体である。2次調査の東西溝 39 に続くものとする。

土坑 79 調査区の西端で検出した。南北 2.8 m、東西 0.3 m、深さ 0.1 mある。埋土は褐灰色泥土が主体である。2次調査の東西溝 9、南北溝 44 に続くものとする。

第3面の遺構 (図 13)

古墳時代 調査区の北部で、溝 37 や土坑 94 ~ 134 を検出した。

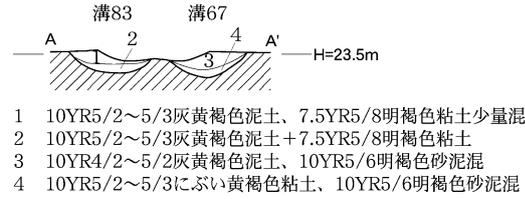
土坑 94 ~ 134 これらは東西 0.5 ~ 0.8 m、南北 1 ~ 3.5 mの南北方向に長い不定形状を呈し、深さ 0.1 ~ 0.3 mある。埋土は西部土坑群では灰黄褐色泥土が主体で、東部土坑群では暗灰黄色シルトが主体である。東部土坑群では、土坑が南北に途切れているが連続すれば約 6 mの溝状となる。東部と西部の土坑群は、攪乱により東西に分断されているが本来は一連のものと考えられ、



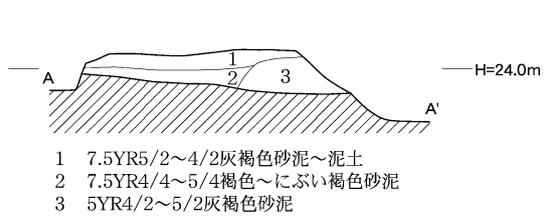
柱穴61	柱当り	7.5YR4/4褐色砂泥+7.5YR5/1褐色泥土	柱穴64	柱当り	7.5YR4/6褐色砂泥+10YR6/4灰黄褐色泥土、やや粘質
	掘形上層	7.5YR4/4褐色砂泥		掘形上層	7.5YR4/6褐色砂泥+10YR6/4灰黄褐色泥土、粘質
	掘形中層	7.5YR5/1 褐色泥土		掘形下層	10YR5/2~4/2灰黄褐色泥土、粘質
	掘形下層	7.5YR4/4褐色砂泥、粘質			
柱穴62	柱当り上層	10YR6/2~5/2灰黄褐色泥土	柱穴65	柱当り上層	10YR5/2灰黄褐色泥土
	柱当り下層	7.5YR4/3褐色砂泥、やや粘質		柱当り下層	10YR5/2灰黄褐色泥土
	掘形上層	10YR5/2灰黄褐色泥土+7.5YR4/4褐色砂泥		掘形上層	10YR5/2灰黄褐色泥土
	掘形下層	7.5YR4/3褐色砂泥、やや粘質		掘形下層	7.5YR4/4褐色砂泥、やや粘質
柱穴63	柱当り上層	10YR5/2灰黄褐色泥土+7.5YR4/4褐色砂泥			
	柱当り下層	10YR4/3~4/4褐色粘土			
	掘形上層	10YR5/2灰黄褐色泥土+7.5YR4/4褐色砂泥			
	掘形下層	10YR5/2灰黄褐色泥土+7.5YR5/4にぶい褐色砂泥			

図 14 1区建物1実測図 (1:100)

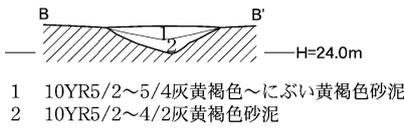
溝67・溝83（1区第2面平面図）



土坑77（1区第3面平面図）



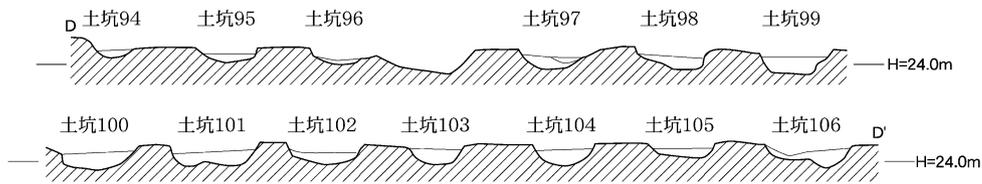
溝37（1区第3面平面図）



土坑92（1区第3面平面図）



西部土坑群（1区第3面平面図）



- | | |
|--------------------------------------------------|------------------------------------------|
| 土坑94 10YR4/2灰黄褐色泥土 | 土坑100 2.5Y5/2~5/3暗灰黄色~黄褐色泥土 |
| 土坑95 10YR5/2~6/2灰黄褐色泥土 | 土坑101 2.5Y5/2~5/3暗灰黄色~黄褐色泥土 |
| 土坑96 10YR4/2~5/2灰黄褐色泥土 | 土坑102 7.5YR4/4褐色砂泥+10YR4/2灰黄褐色泥土 |
| 土坑97 上層 10YR5/2~6/2灰黄褐色泥土
下層 7.5YR4/3~4/4褐色砂泥 | 土坑103 7.5YR4/6~5/6褐色~明褐色砂泥+10YR4/2灰黄褐色泥土 |
| 土坑98 2.5Y5/4黄褐色砂泥+10YR4/2灰黄褐色泥土 | 土坑104 2.5Y5/2~5/3暗灰黄色~黄褐色泥土 |
| 土坑99 2.5Y5/4黄褐色砂泥+10YR4/2灰黄褐色泥土 | 土坑105 2.5Y5/2~5/3暗灰黄色~黄褐色泥土 |
| | 土坑106 2.5Y5/3黄褐色泥土 |

東部土坑群（1区第3面平面図）

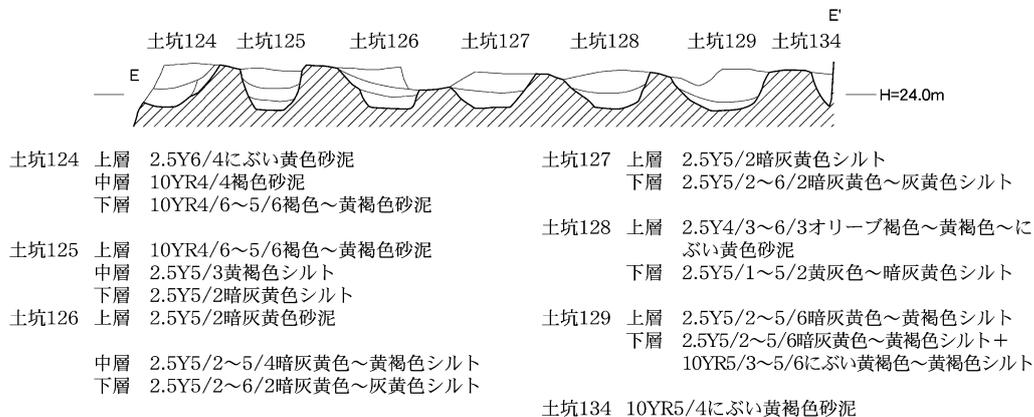


図 15 1区遺構断面図（1：50）

さらに調査区外の西と東に連続するとみられる。土坑 100・128 から古墳時代後期の須恵器が出土した。

溝 37 調査区北側で検出した。幅 0.7 m、深さ 0.2 m で、北西から南東方向に延びる。基礎攪乱で削平されているが、全長約 9 m を検出した。埋土はにぶい灰黄褐色砂泥を主体とする。北西から南東方向に約 0.1 m 低くなっている。

弥生時代 調査区の東部で、土坑 92 を検出した。東西 3.5 m 以上、南北 11.2 m 以上の不定形で、深さ約 0.2 m あり、調査区外の東に広がる。埋土は黄褐色砂泥が主体である。弥生土器の壺底部が出土した。

(4) 2 区の遺構

室町時代から江戸時代の遺構は、平安時代末期から鎌倉時代初頭の整地層上面で検出した。平安時代およびそれ以前の遺構は、地山上面で検出した。検出した遺構は、室町時代から江戸時代の耕作溝、平安時代前期の掘立柱建物・溝・土坑・落込み、古墳時代後期の自然流路がある。

第 1 面の遺構 (図 16、図版 3)

江戸時代 溝 7・10・15・18 などの耕作溝があり、大半は東西方向に延びる。幅 0.5 ～ 1.1 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m ある。埋土は灰黄褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥を主体とする。耕作溝には近代以降のものもあるが、出土遺物が江戸時代に限定できるものを遺構とした。

平安時代末期から鎌倉時代初頭 調査区の南部一帯で整地層を検出した。厚さは約 0.2 m ある。整地土は暗褐色砂泥やにぶい赤褐色砂泥を主体とする。この時期に大規模な整地が行われたとみられる。この面で、当該期の建物などに関連する遺構は検出できなかった。

第 2 面の遺構 (図 17、図版 3～8)

平安時代前期の遺構には、掘立柱建物・溝・埋納遺構・土坑・落込みなどがある。

建物 1 (図 19、図版 6・7) 調査区北東部で検出した掘立柱建物である。西側は攪乱により削平を受ける。南北 2 間 (2.5 m)、東西 5 間分 (11.4 m) を検出した東西棟である。柱穴掘形は径 0.6 ～ 0.7 m の隅丸方形で、深さは 0.3 ～ 0.5 m ある。桁行方向の柱間は平均 2.3 m、梁行方向の柱間は平均 2.2 m ある。柱穴 68 の柱抜き取り穴に、土師器甕・緑釉陶器唾壺などの土器類と貞観永寶 (初鑄 870 年) が埋納されていた。柱穴 (168・169・173) にはヒノキ材の柱根が遺存する。

建物 2 (図 20、図版 4) 調査区南西部で検出した掘立柱建物である。東西 2 間 (4.9 m)、南北 4 間分 (9.6 m) を検出した南北棟である。柱穴掘形は径 0.5 ～ 0.8 m の円形で、深さは約 0.3 m ある。桁行方向の柱間は平均 2.4 m ある。柱穴 158 と 159 の間は溝 57 により壊されているが本来は柱穴があったとみて梁行は 2 間と復元した。柱穴掘形からは土師器・須恵器などの小片が出土した。

建物 3 (図 21、図版 4・8) 調査区南西部で検出した掘立柱建物である。東西 2 間 (4.4 m)、南北 4 間 (8.4 m) を検出した南北棟である。柱穴掘形は一辺 0.5 ～ 0.7 m の隅丸方形で、深さは 0.3



图 16 2区第1面遺構平面図 (1 : 200)

平安京右京六条二坊三町

東二行 ← | → 東一行

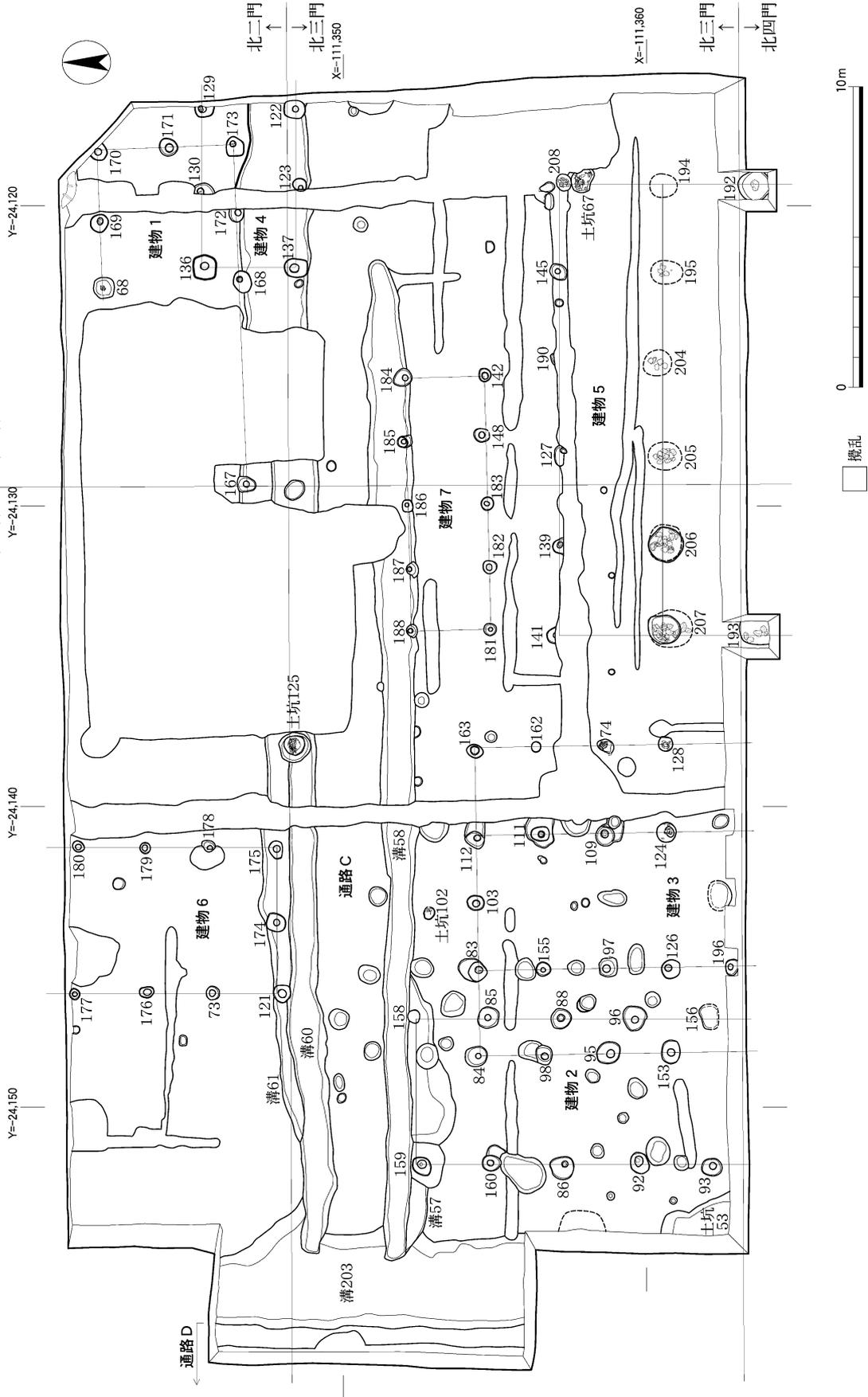


图 17 2区第2面遺構平面図 (1 : 200)

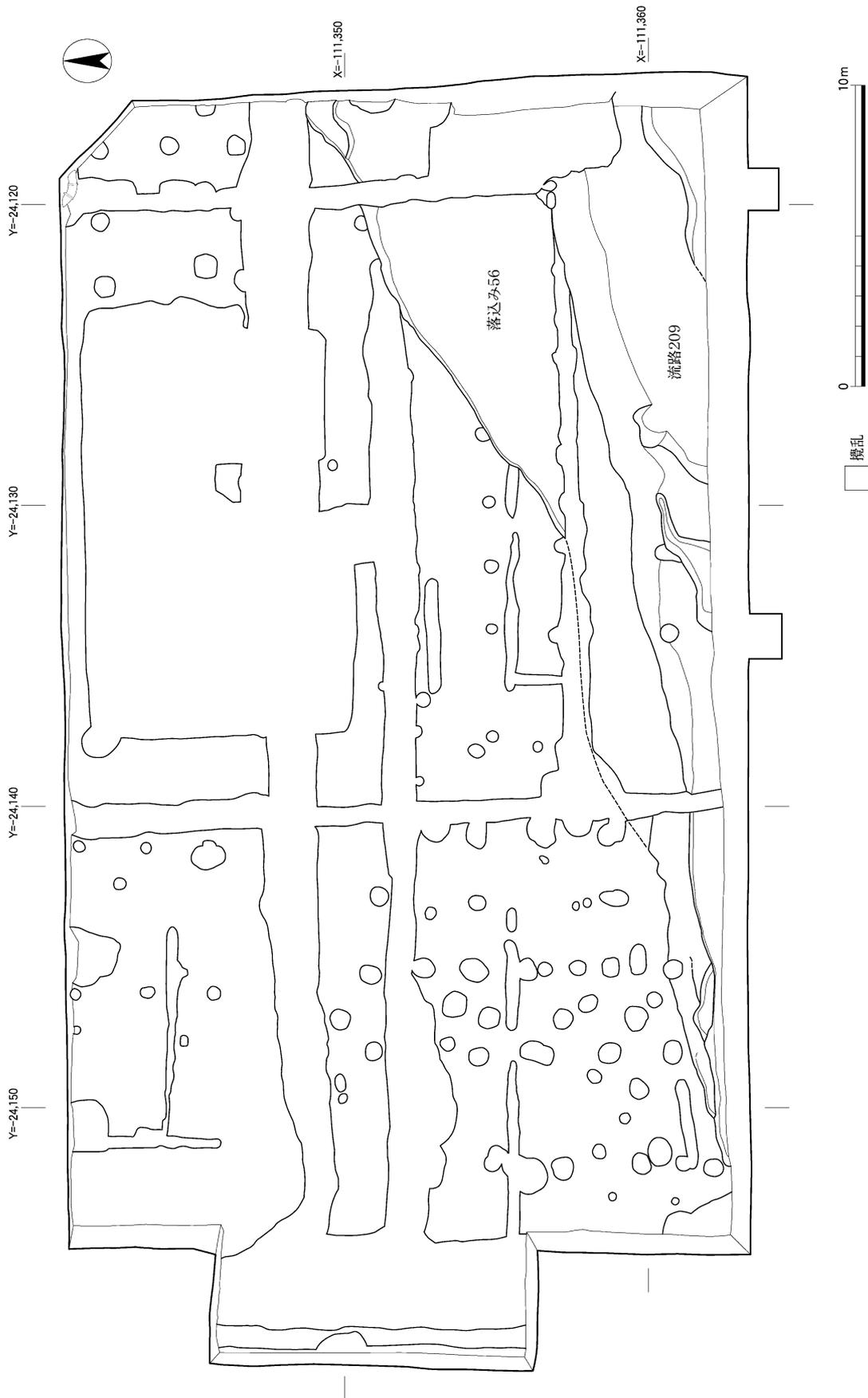
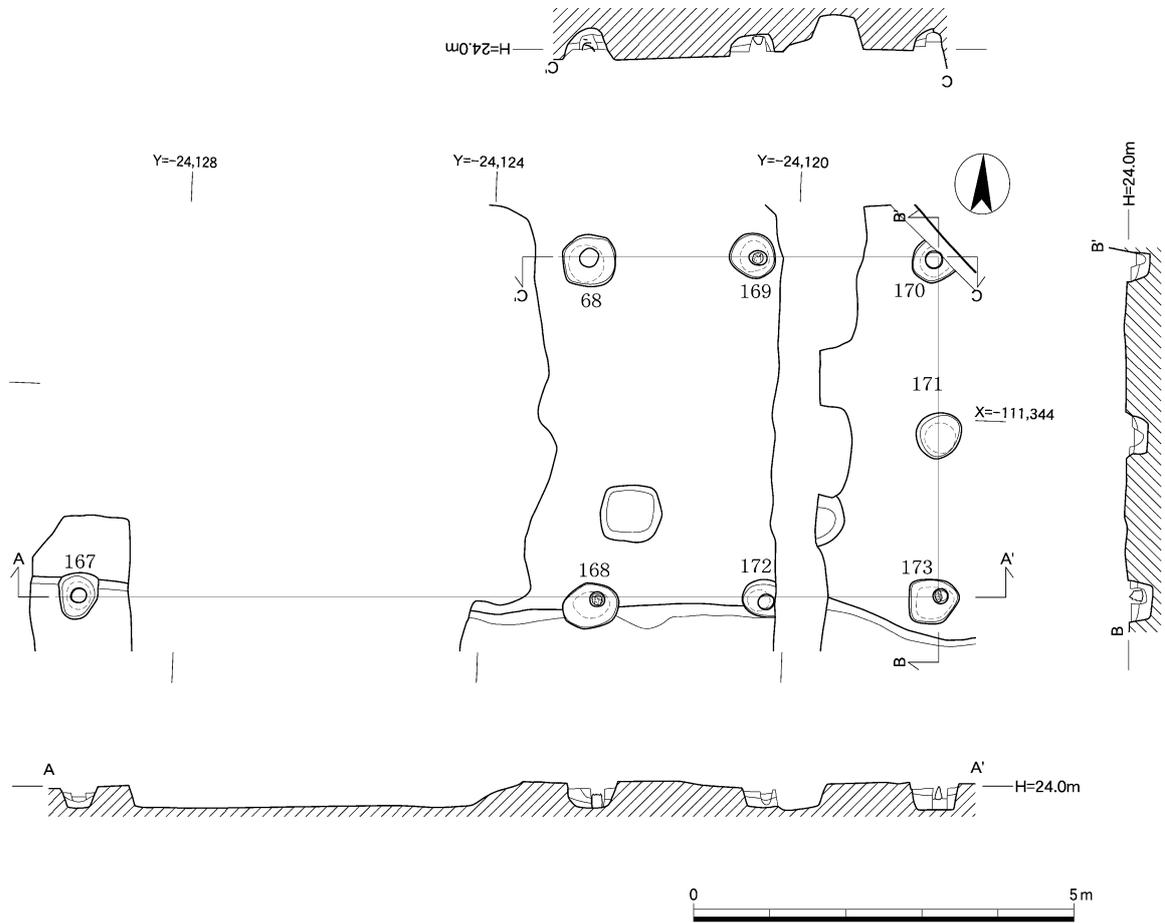
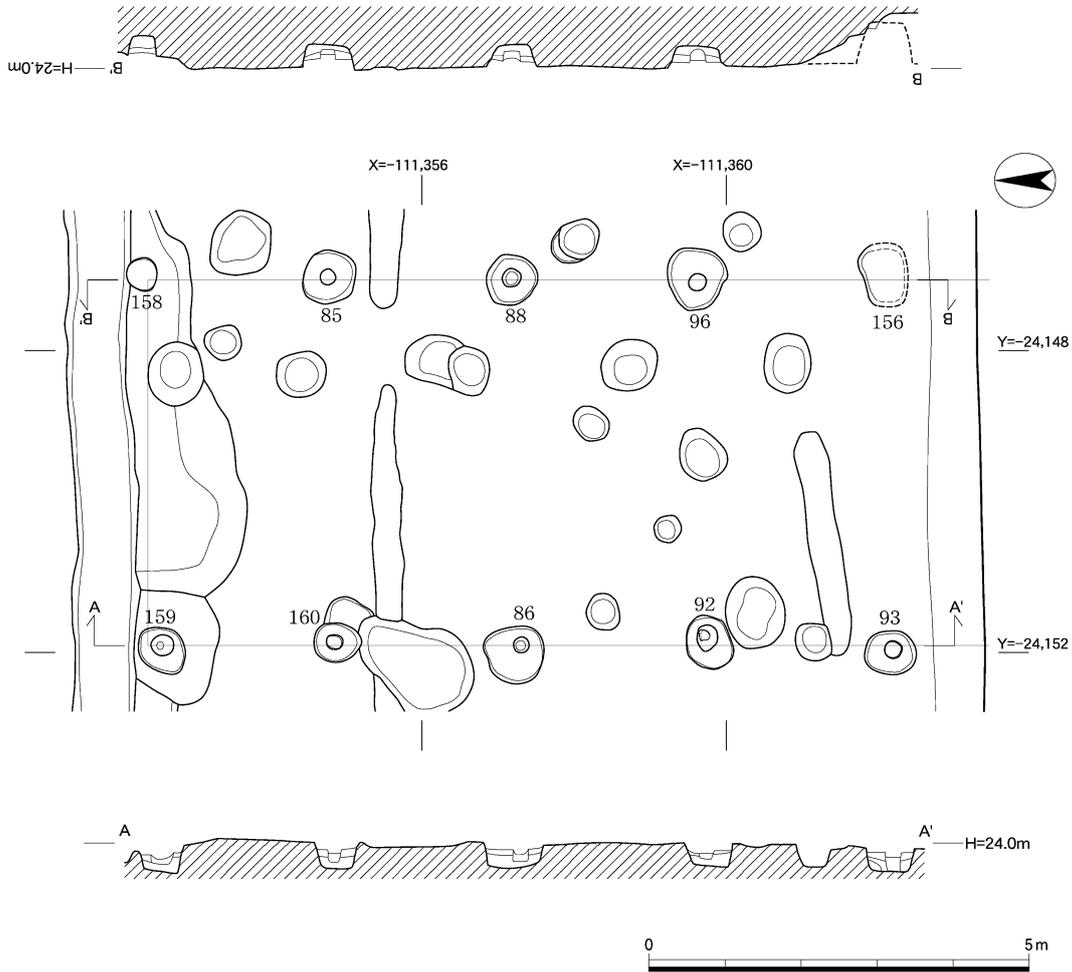


図 18 2区第3面遺構平面図 (1 : 200)



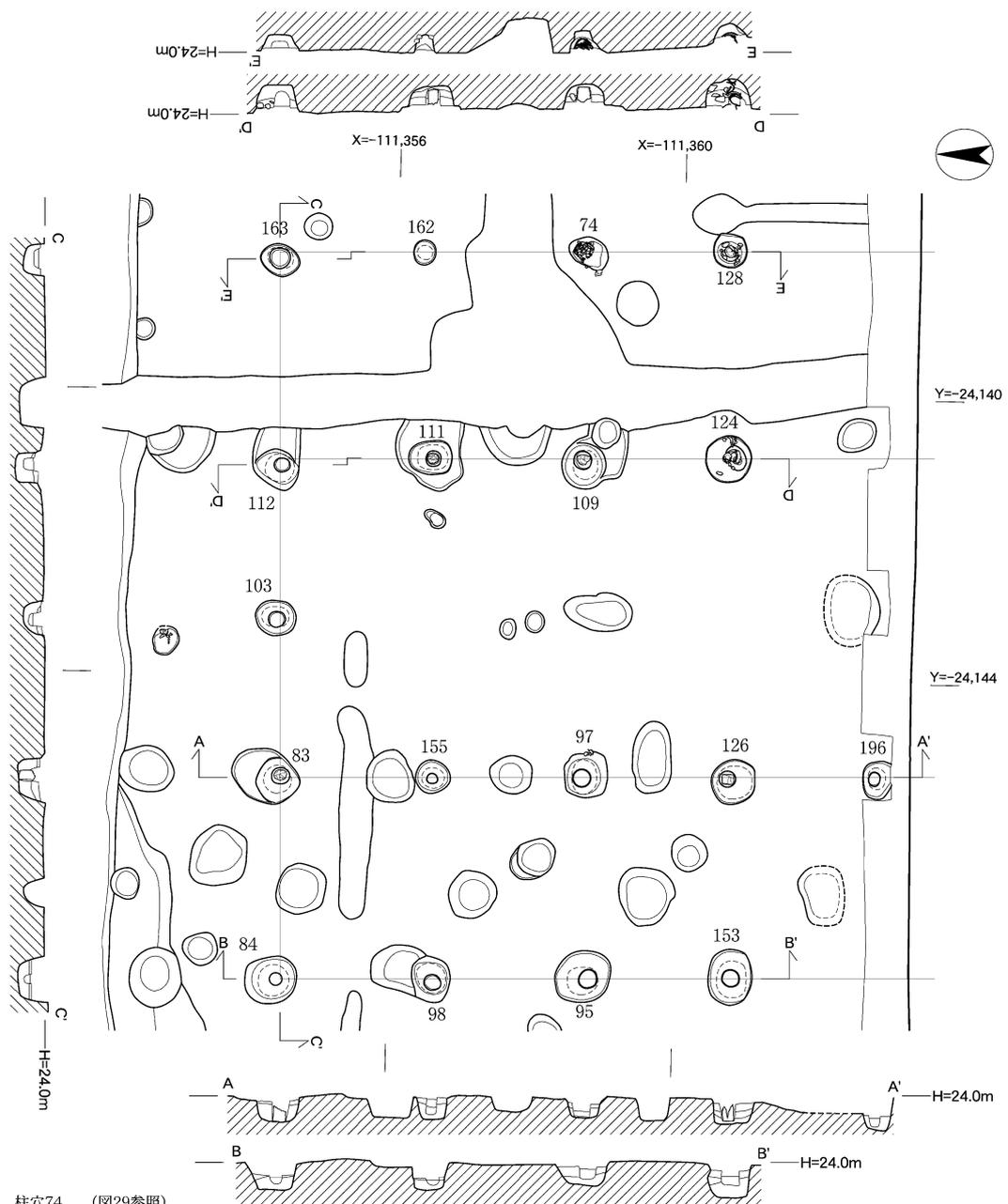
柱穴68	柱当り	10YR2/2黒褐色砂泥、炭混	柱穴170	柱当り	10YR3/2~4/2黒褐色~灰黄褐色砂泥
	掘形上層	10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、炭・礫混		掘形上層	10YR4/2~5/2灰黄褐色砂泥
	掘形中層	10YR4/2灰黄褐色粗砂、小礫混		掘形下層	10YR3/2黒褐色砂泥、小礫多量混
	掘形下層	10YR4/1褐灰色砂礫	柱穴171	柱当り	10YR4/1褐灰色粘土
柱穴167	柱当り	10YR3/2黒褐色砂泥		掘形上層	10YR4/2灰黄褐色砂泥
	掘形上層	10YR5/2灰黄褐色砂泥		掘形下層	10YR4/1~5/1褐灰色砂、粗砂主体
	掘形下層	10Y4/3にぶい黄褐色砂	柱穴172	柱当り上層	10YR4/1~4/2褐灰色~灰黄褐色粘土
柱穴168	柱当り	7.5~10YR3/2黒褐色粘土		柱当り下層	10YR3/2黒褐色砂泥
	掘形上層	10YR4/2灰黄褐色砂泥		掘形上層	10YR4/1~4/2褐灰色~灰黄褐色砂泥、礫混
	掘形中層	10YR4/2灰黄褐色砂泥		掘形下層	10YR3/2~4/2黒褐色~灰黄褐色砂、小礫混
	掘形下層	10YR2/3~3/3黒褐色~暗褐色砂、粗砂主体	柱穴173	柱当り	10YR3/1~4/1黒褐色~褐灰色粘土
柱穴169	柱当り	10YR3/2~4/2黒褐色~灰黄褐色砂泥		掘形上層	10YR4/1~4/2褐灰色~灰黄褐色砂泥
	掘形	10YR4/2灰黄褐色砂泥		掘形下層	10YR4/1褐灰色砂泥、粘土多量

図 19 2区建物1実測図 (1:100)



柱穴85	柱当り	2.5Y3/1黒褐色砂泥	柱穴96	柱当り	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
	掘形上層	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫多量混		掘形上層	2.5Y4/2暗灰色砂泥、礫多量混
	掘形下層	2.5Y4/4黄灰色砂泥、礫多量混		掘形下層	2.5Y4/1黄灰色砂泥～泥砂、小礫多量混
柱穴86	柱当り	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥	柱穴156	2.5Y3/2黒褐色砂泥	
	掘形上層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥	柱穴158	上層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
	掘形下層	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫混		下層	2.5Y4/1黄灰色泥砂、礫混
柱穴88	柱当り	2.5Y4/2暗灰黄砂泥	柱穴159	柱当り	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
	掘形上層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、礫多量混		掘形上層	2.5Y3/2黒褐色砂泥、礫多量混
	掘形下層	2.5Y4/2暗灰黄色泥砂、礫多量混		掘形下層	2.5Y4/1黄灰色泥砂、礫多量混
柱穴92	柱当り	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥	柱穴160	柱当り	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
	掘形上層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、礫多量混		掘形上層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
	掘形下層	2.5Y4/1黄灰色泥砂、礫混		掘形中層	2.5Y4/1黄灰色砂泥、炭混
柱穴93	柱当り	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥		掘形下層	2.5Y4/1～5/1黄灰色砂泥～泥砂
	掘形上層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥			

図 20 2区建物2実測図(1:100)



柱穴74 (図29参照)

柱穴83 柱当り 10YR5/2灰黄褐色砂泥
掘形上層 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫多量混
掘形下層 2.5Y4/1~5/1黄灰色泥砂~砂泥

柱穴84 柱当り 2.5Y4/1黄灰色砂泥
掘形上層 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
掘形下層 2.5Y4/1黄灰色泥砂~砂泥

柱穴95 柱当り 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
掘形上層 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
掘形下層 2.5Y4/1黄灰色泥砂~砂泥

柱穴97 (図29参照)

柱穴98 柱当り 2.5Y3/2黒褐色砂泥
掘形上層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、礫混
掘形下層 10YR4/1褐色砂泥

柱穴109 柱当り 2.5Y4/1~4/2暗灰黄色泥土
掘形上層 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
掘形下層 2.5Y4/1黄灰色泥砂

柱穴111 柱当り 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
掘形上層 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、礫多量混
掘形中層 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂、礫混
掘形下層 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂

柱穴112 柱当り 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
掘形上層 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、礫多量混
掘形下層 2.5Y5/3黄褐色砂泥



柱穴124 (図29参照)

柱穴126 柱当り 2.5Y4/1黄灰色砂泥、やや粘質
掘形上層 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥、炭混
掘形中層 2.5Y3/2暗褐色砂泥
掘形下層 10YR4/2灰黄褐色泥砂、礫混

柱穴128 (図29参照)

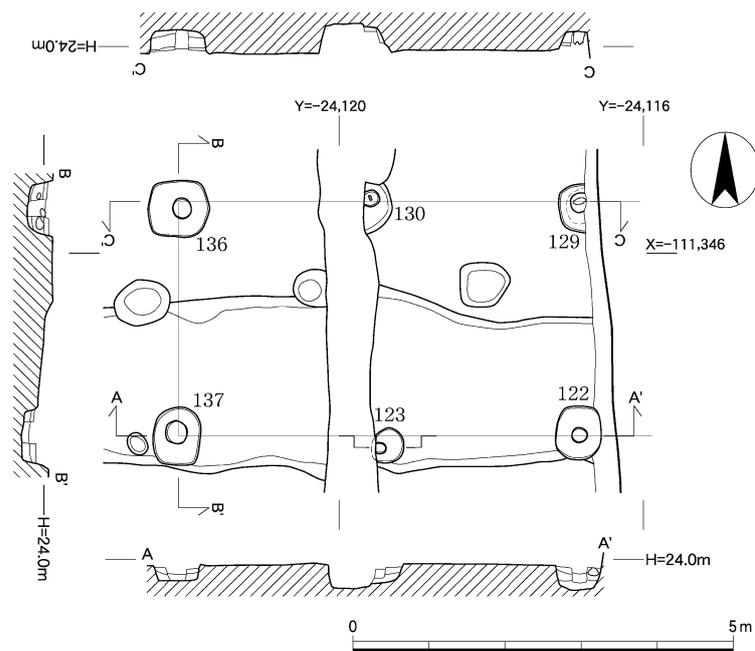
柱穴153 柱当り 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
掘形上層 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
掘形中層 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥
掘形下層 2.5Y4/1黄灰色泥砂

柱穴155 柱当り上層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
柱当り下層 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥~泥砂
掘形上層 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
掘形下層 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂

柱穴162 上層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、礫混
下層 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭多量混

柱穴163 柱当り 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
掘形 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂、礫混

図21 2区建物3実測図(1:100)



柱穴122	柱当り	2.5Y4/1~5/1黄灰色砂泥、やや粘質	柱穴130	柱当り	2.5Y3/2黒褐色砂泥、やや粘質、木質小片混
	掘形上層	10YR4/2灰褐色砂泥、礫多量混		掘形	2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥
	掘形中層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥	柱穴136	柱当り	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、やや粘質
	掘形下層	2.5Y4/2暗灰黄色泥砂、礫多量混		掘形上層	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
柱穴123	柱当り	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥		掘形中層	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
	掘形上層	2.5Y5/3黄褐色砂泥、炭・礫少量混		掘形下層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
	掘形下層	2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、小礫多量混	柱穴137	柱当り	2.5Y3/2黒褐色砂泥
柱穴129	柱当り	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、やや粘質		掘形上層	2.5Y4/2暗灰黄色粘質土
	掘形上層	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥		掘形下層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
	掘形下層	2.5Y3/2黒褐色砂泥			

図22 2区建物4実測図(1:100)

～0.4 mある。桁行方向の柱間は平均2.1 m、梁行方向の柱間は平均2.2 mある。柱穴97・124の柱抜き取り穴に、土師器皿・杯・甕・竈、黒色土器杯・甕、須恵器壺・甕などの土器類や瓦が埋納される。柱穴4基(126・83・111・109)にはヒノキ材の柱根が遺存する。建物から2.8～2.9 m西側に南北柱列(柱穴84・98・95・153)があり、建物の西底の可能性もある。また、建物から2.9 m東側に南北柱列(柱穴163・162・74・128)があり、建物の東底の可能性もある。柱穴74・128の柱抜き取り穴には、土師器杯、須恵器杯・甕、緑釉陶器皿、灰釉陶器碗などの土器埋納がある。さらに、北側にも庇が付く可能性がある。

建物4(図22、図版5)調査区北東部で検出した掘立柱建物である。南北1間(3.1 m)、東西2間(5.5 m)分を検出した東西棟である。柱穴掘形は一辺0.5～0.8 mの隅丸方形で、深さは約0.3 mある。桁行方向の柱間は平均2.6 mある。柱穴129にはヒノキ材の柱根が遺存する。また、柱穴130からはカヤ材が出土しているが、建築部材としては希なため、柱根ではない可能性が高い。

建物5(図23、図版6)調査区南東部で検出した掘立柱建物である。東西5間(15.0 m)、南北1間分(3.1 m)を検出した東西棟である。柱穴掘形は径1.2～1.4 m、深さ約0.8 mの円形で、掘形内に径0.1～0.3 mの石を多量に入れている。3.4 m北側には径0.5～0.6 m、深さ0.2～0.3 mのやや小型の円形の柱穴が並び、東端に位置する柱穴208は径0.1 mの石を多量に入れている。

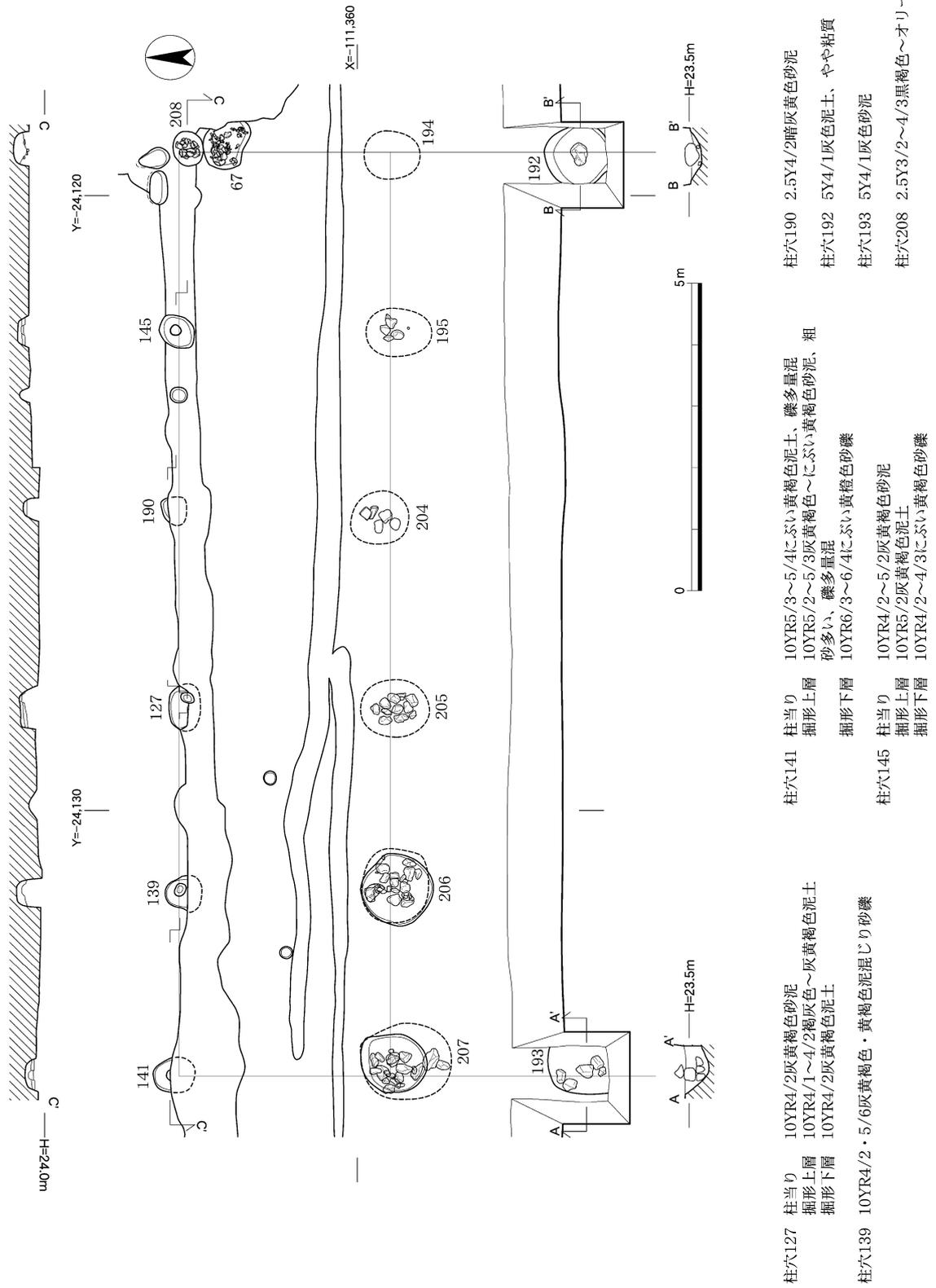
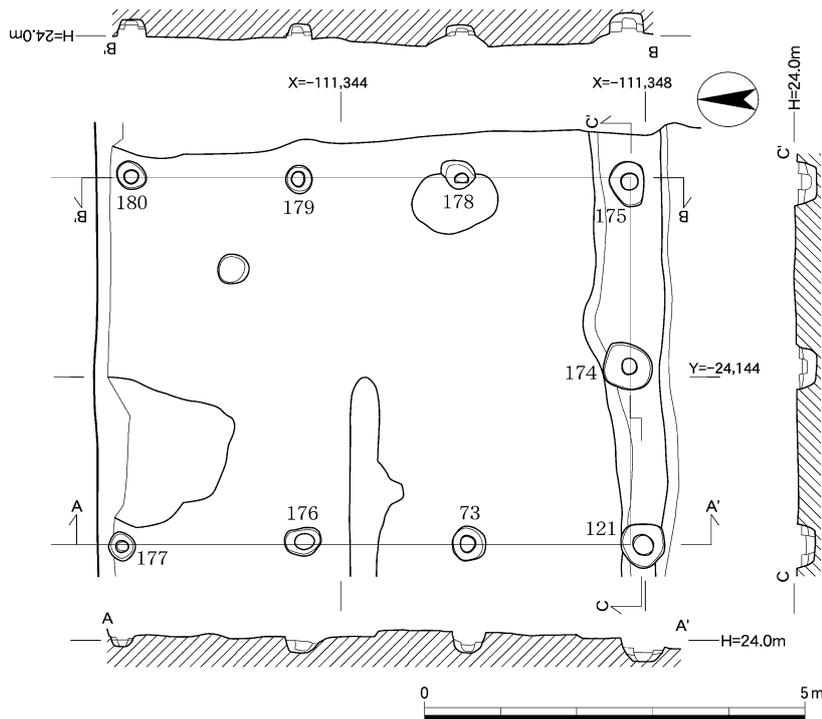


図 23 2区建物5実測図 (1:100)



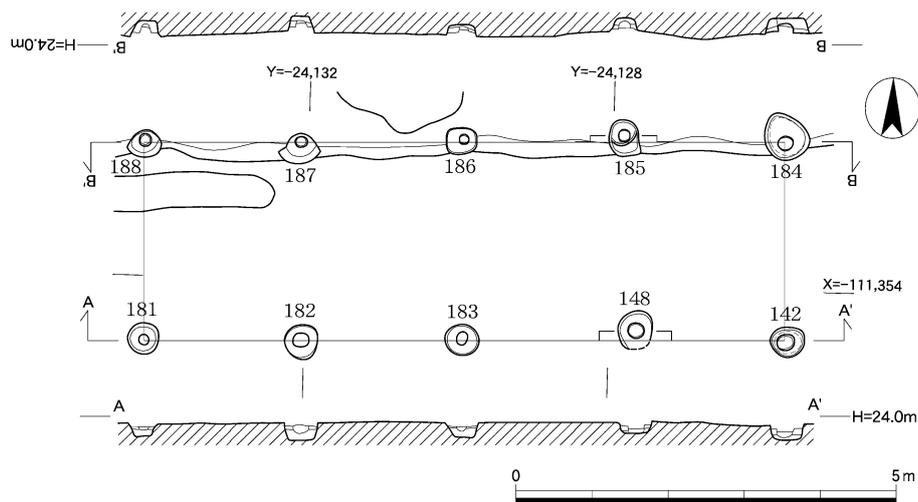
柱穴73	柱当り 掘形	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y5/3黄褐色砂泥	柱穴177	柱当り 掘形上層 掘形下層	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 2.5Y3/2黒褐色泥砂、小礫混
柱穴121	柱当り 掘形上層 掘形下層	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥	柱穴178	柱当り 掘形上層 掘形下層	10YR5/2灰黄褐色砂泥 10YR4/1~4/2褐灰色~灰黄褐色砂泥 10YR3/3暗褐色砂泥、粗砂多い、小礫混
柱穴174	柱当り 掘形上層 掘形下層	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 2.5Y5/3黄褐色砂泥、礫混 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂、礫多量混	柱穴179	柱当り 掘形上層 掘形下層	10YR3/2~3/3黒褐色~暗褐色砂泥 10YR4/2灰黄褐色泥混じり砂礫 2.5Y4/2灰黄褐色泥砂、小礫多量混
柱穴175	柱当り 掘形上層 掘形下層	10YR4/1~4/2褐灰色~灰黄褐色砂泥、粗砂多い、柱根わずかに混 10YR4/2灰黄褐色砂泥 10YR3/2黒褐色砂泥、粗砂多い	柱穴180	柱当り 掘形上層 掘形下層	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、礫混 2.5Y4/2灰黄褐色泥砂、小礫多量混
柱穴176	柱当り 掘形上層	2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 2.5Y4/2~5/2暗灰黄色砂泥			

図 24 2区建物6実測図(1:100)

桁行方向の柱間は平均3.0 mある。北側に底が付くとみられる。南側に拡張して柱穴194の柱筋で柱穴192、柱穴207の柱筋で柱穴193を検出したことにより南側に少なくとも1間分は広がることを確認した。柱穴206底部からは曲物が出土した。柱穴内の集石は、礎石の根固めの可能性も考えられるが、湿地状の落込み56を整地した部分にあたることから、柱の沈下を防ぐための措置と考え、掘立柱建物として復元した。

建物6(図24、図版5)調査区北西部で検出した掘立柱建物である。東西2間(4.8 m)、南北3間分(6.8 m)を検出した南北棟である。柱穴掘形は径0.4~0.6 mの円形で、深さは0.2~0.3 mある。桁行方向の柱間は平均2.3 m、梁行方向の柱間は平均2.4 mある。

建物7(図25、図版6)調査区東部で検出した掘立柱建物である。南北1間(2.7 m)、東西4間(8.5 m)の東西棟である。柱穴掘形は径0.3~0.6 mの円形で、深さは約0.2 mある。桁行方向の柱間は平均2.1 mある。



- | | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>柱穴142 柱当り 2.5Y4/1~5/1黄灰色砂泥。小礫、柱根片?混
掘形上層 10YR4/1~4/2褐灰色~灰黄褐色泥土
掘形下層 10YR4/1~5/3褐灰色~灰黄褐色~にぶい黄褐色砂礫</p> <p>柱穴148 柱当り 10YR5/2~5/3灰黄褐色~にぶい黄褐色泥土
掘形上層 10YR5/1~5/2褐灰色~灰黄褐色砂泥、礫混
掘形下層 10YR3/2黒褐色砂泥、礫混</p> <p>柱穴181 柱当り 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫多量混
掘形上層 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫混
掘形下層 10YR3/2黒褐色砂泥、小礫混</p> <p>柱穴182 柱当り 10YR3/2黒褐色泥土、礫多量混
掘形上層 2.5Y4/1黄灰色砂泥、礫多量混
掘形下層 10YR3/1~3/2黒褐色砂泥、礫多量混</p> <p>柱穴183 柱当り 10YR3/2黒褐色砂泥
掘形上層 10YR3/2~4/2黒褐色~灰黄褐色泥土、礫混
掘形下層 10YR3/3暗褐色砂泥</p> | <p>柱穴184 柱当り 2.5Y3/1黒褐色砂泥
掘形上層 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、小礫多量・炭・焼土少量混
掘形下層 東：2.5Y3/2黒褐色粘質土
西：2.5Y3/2黒褐色砂泥</p> <p>柱穴185 柱当り 2.5Y3/1黒褐色砂泥、炭混
掘形上層 2.5Y3/2黒褐色砂泥
掘形下層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥</p> <p>柱穴186 柱当り 2.5Y3/1黒褐色砂泥
掘形上層 2.5Y3/2黒褐色砂泥
掘形下層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥</p> <p>柱穴187 柱当り 2.5Y3/1黒褐色砂泥
掘形上層 2.5Y3/1黒褐色砂泥
掘形下層 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥</p> <p>柱穴188 柱当り 2.5Y3/1黒褐色砂泥
掘形 2.5Y3/2黒褐色砂泥</p> |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図 25 2区建物7実測図 (1:100)

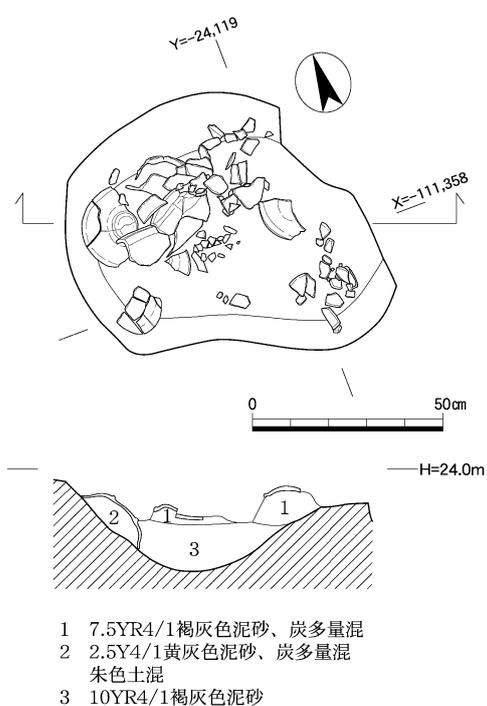


図 26 2区土坑 67 実測図 (1:20)

- 1 7.5YR4/1褐灰色泥砂、炭多量混
- 2 2.5Y4/1黄灰色泥砂、炭多量混
朱色土混
- 3 10YR4/1褐灰色泥砂

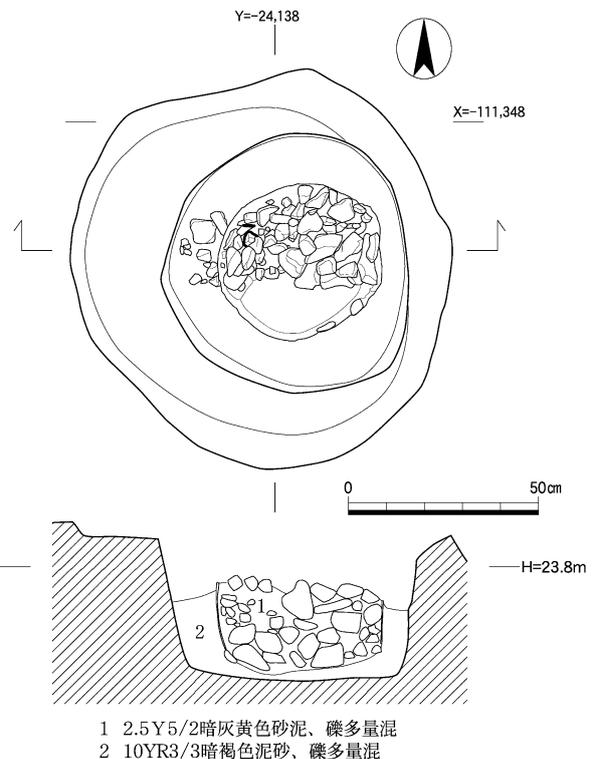
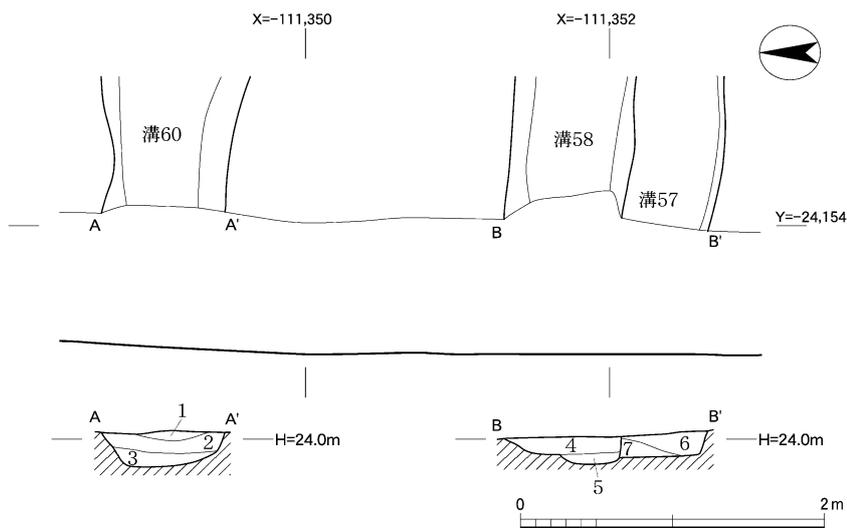


図 27 2区土坑 125 実測図 (1:20)

- 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥、礫多量混
- 2 10YR3/3暗褐色泥砂、礫多量混



- | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| <p>[溝60]</p> <p>1 7.5YR4/3褐色砂泥、小礫混</p> <p>2 10YR4/2灰黄褐色砂泥</p> <p>3 10YR3/2黒褐色砂泥、砂礫混</p> | <p>[溝58]</p> <p>4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥</p> <p>5 7.5YR4/3～10YR4/3褐色～にぶい黄褐色砂泥、小礫・炭混</p> |
| | <p>[溝57]</p> <p>6 10YR3/4暗褐色砂泥</p> <p>7 10YR4/4褐色砂泥、炭混</p> |

図 28 2区溝 58・60 断面図 (1:50)

溝 57・58 (図 28、図版 6) 調査区中央部で検出した東西方向の溝である。溝 58 は幅 0.8 ～ 1.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m あり、東西約 33.5 m にわたって検出した。埋土は暗灰黄色砂泥が主体である。東端に向かって徐々に浅くなる。検出した位置は、溝 60 の約 3.3 m 南側を並行に延びる。溝 58 の西端で、南に接して溝 57 がある。東西約 9.5 m、幅約 1.5 m、深さ 0.2 m あり、溝が一時期南側に広がっていた部分とみられる。建物 2・7 と重複し、溝 57・58 が新しい。9 世紀中頃から後半の遺物が出土した。

溝 60・61 (図 28、図版 6) 調査区北寄りで検出した東西方向の溝である。溝 60 は幅 0.9 ～ 1.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m、東西約 38.5 m にわたって検出した。埋土は黄灰色砂泥が主体である。北二・三門の境に当たる。北に接して幅 0.5 ～ 1.0 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m の溝 61 がある。時期差はみられず、同一の遺構とみられる。建物 4・6・8、土坑 125 と重複し、溝 60・61 が新しい。9 世紀中頃から後半の遺物が出土した。

溝 203 西側拡張区で検出した南北方向の溝である。幅 2.3 ～ 3.0 m、深さ約 0.3 m、南北約 10 m にわたって検出した。埋土はにぶい黄褐色砂泥が主体である。溝 58・60 の西端と接続する。9 世紀中頃から後半の遺物が出土した。西側で検出している 1 次調査の溝 179 と並行する。のちに東部分を埋めて幅 1.3 ～ 1.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m に縮小された時期を溝 201 (図版 7) とした。

通路 C (図版 6) 調査区中央に位置する東西方向の溝 58 と溝 60 に挟まれた箇所である。両溝の心々間は 2.6 ～ 3.6 m、通路幅は 2.6 ～ 3.3 m あり、上部は削平されている。

通路 D (図版 7) 西側拡張区に位置する南北方向の溝 203 の西側箇所である。1 次調査の南北溝 179 の東側箇所にあたる。両溝の心々間は 3.8 ～ 4.2 m、通路幅は 2.1 ～ 2.4 m あり、上部は

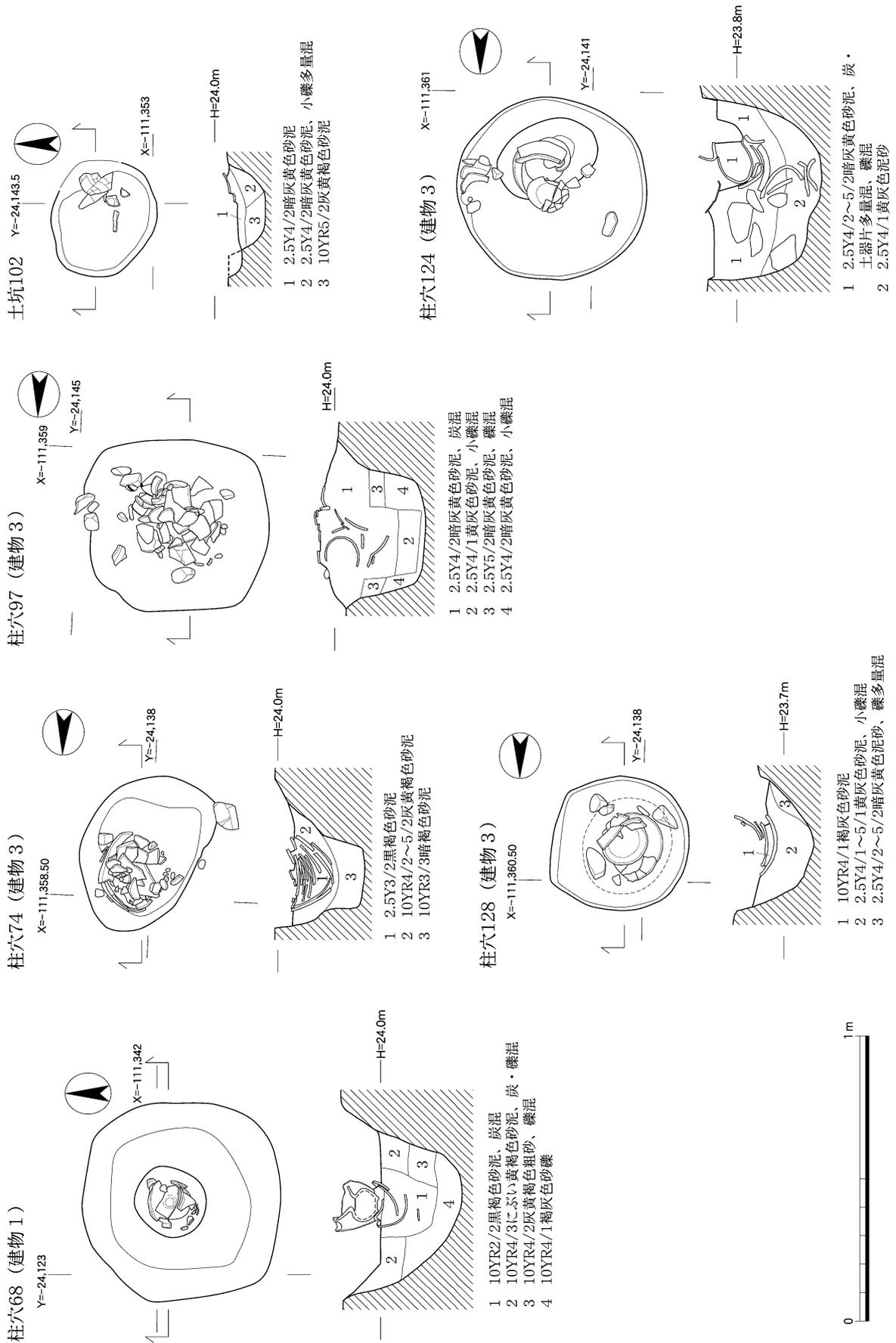


图 29 2 区埋納遺構実測図 (1 : 20)

削平されている。

土坑 67 (図 26、図版 7) 調査区南東で検出した。建物 5 の北東隅に位置する。南北約 0.7 m、東西 0.7 m 以上の不定形で、深さは約 0.25 m である。埋土は灰黄褐色砂泥を主体とする。土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器などが出土した。灰釉陶器碗にはベンガラが多量に付着している。埋納土坑または廃棄土坑の可能性はある。9 世紀中頃から後半の遺物が出土した。

土坑 102 (図 29) 建物 3 の 1.5 m 北に位置する。掘形は径 0.4 m の円形で、深さは 0.3 m である。埋土は暗灰黄色砂泥である。土師器、須恵器、金属製品が出土した。

土坑 125 (図 27) 調査区中央北寄りで検出した。径約 1.1 m の円形の掘形内に、直径約 0.4 m の曲物が据え付けられている。掘形の深さは検出面から約 0.4 m で、底部は砂礫層となる。埋土は暗灰黄色砂泥を主体とする。廃絶時には、多量の礫で埋戻されている。

落込み 56 調査区南東部で検出した。南北幅 13 m 以上、東西長 35 m 以上の南東側への落込みである。深さは最も深い所で約 0.9 m である。埋土は黄灰色から黒褐色の砂泥を主体とする。埋土からは平安時代前期の遺物が出土した。建物 5 との関係から、第 3 面に記載している。

第 3 面の遺構 (図 18)

古墳時代 調査区の南部に流路がある。

流路 209 北東から南西に向かって流れる自然流路で、堆積土はオリーブ褐色から黄褐色の粗砂を主体とする。上層には黒褐色の泥土および砂泥の堆積がみられる。落込み 56 の下に位置する。古墳時代の土師器や須恵器が出土した。

4. 遺物

(1) 出土遺物の概要

弥生時代から近代にわたる各時代の遺物が出土した。遺物は整理箱で106箱であった。その内訳は、土器・陶磁器・瓦・木製品・金属製品・銭貨・石製品・自然遺物などがある。土器類の出土が最も多く瓦類も比較的多いが、その他は少ない。

弥生時代の土器は、1区の土坑92から壺が出土している。

古墳時代の土器類は、1区の土坑や2区の流路209などから土師器・須恵器が出土した。

平安時代の遺物は多くが前期のもので、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器などの土器・陶磁器類や瓦類などのほか、木製品・銭貨など多岐にわたる。1・2区の柱穴や溝、土坑などの遺構から出土している。

平安時代末～鎌倉時代初頭の遺物は、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器など、少量であるが主に2区の整地層から出土している。

以後、中世～江戸時代以降の遺物には、国産の陶磁器類などがあるが、少量である。

(2) 1区の出土遺物 (図30)

1区からの出土遺物は、弥生土器から近世末・明治時代のものがある。ただ、いずれも小片が多く、出土量も少ない。その中では平安時代前期の遺物が、溝9・溝39などに比較的多く含まれている。

壺(1)は土坑92から出土した弥生土器の壺底部で、底径は9.8cmある。内外面とも磨滅が著しく、調整などは不明であるが、残存部外面の上端近くに一条沈線が巡る。須恵器の杯蓋(2)は土坑100から出土している。6世紀後半から末頃のものである。土師器皿(3)・緑釉陶器皿(4)と黒色土器甕(7)は溝39から出土している。土師器皿は口径13.9cm、器高1.5cmで口縁端部は

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	土器		壺1点		
古墳時代	土師器、須恵器		土師器1点、須恵器5点		
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、金属製品、石製品、木製品		土師器37点、黒色土器4点、須恵器16点、灰釉陶器9点、緑釉陶器10点、輸入陶磁器2点、瓦類5点、銭貨1点、木製品5点		
中世以降	土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、石製品		銭貨2点		
合計		118箱	97点(12箱)	19箱	87箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より12箱多くなっている。

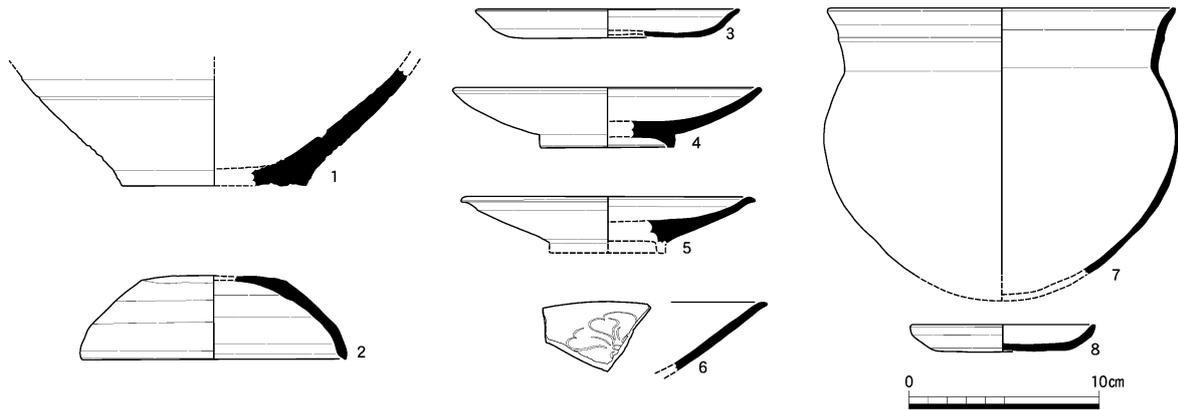


図30 1区出土遺物実測図(1:4)

緩く外反する。胎土は灰白色、焼成はやや軟質で表面の剥落が多く調整は不明である。緑釉陶器皿は口径15.5 cm、器高3.2 cmで、高台をレンズ状にケズリ出し、口縁端部内面に一条の浅い凹線が巡る。胎土は灰白色で須恵質である。釉は薄い緑黄色で、全面に薄く施釉される。黒色土器甕は口径18.3 cm、胴部最大径18.7 cmで、体部の器壁は2~3 mm程度である。口縁端部と内面が黒色を呈し、外面は使用による煤と剥落が著しい。灰釉陶器皿(5)は溝9から出土した。復元口径15.5 cm、器高2.4 cmで、口縁は外側に稜線を持ち外反する。外面は無釉で、内面に雑に灰釉が掛けられている。灰釉陶器片(6)は土坑57から出土した。口径17 cmに復元したが、小片のため不明確である。体部下半が失われており、内面に陰刻花文を施す段皿もしくは椀になるものとおもわれる。内面の灰釉は比較的均一に掛けられているが、外面は雑に刷毛状のもので塗られている。いずれも9世紀後半の遺物である。土師器皿(8)は耕作溝8から出土した。口径9.8 cm、器高1.5 cmである。口縁は内湾して立上がり、端部はやや三角形を呈する。内面と口縁端部付近にナデ調整が残る。京都VI期古頃の遺物である。

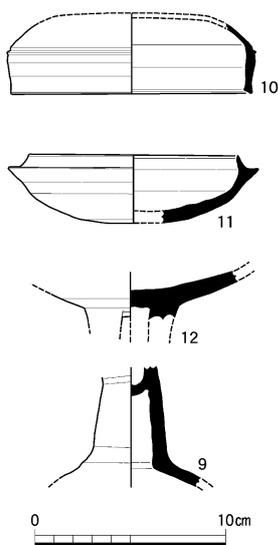


図31 2区流路209出土遺物実測図(1:4)

(3) 2区の出土遺物

2区からの出土遺物は、古墳時代から近世末・明治時代のものがある。古墳時代のもは主に流路209から出土している。前期から後期の幅広い年代の土器類がある。また、種子や木の枝などの自然遺物も含まれていた。平安時代のもは、前期の遺物が各遺構から比較的多く出土しており、特に埋納遺構には一括性の高い遺物が含まれている。平安時代末期~鎌倉時代初頭の遺物は主に整地層に含まれていたが、特筆すべきものはない。中世期以降近代の出土遺物は、第1面の耕作溝に含まれていたが、少量である。

流路209出土遺物(図31) 出土遺物には庄内・布留期と推定される土師器甕の小片から、6世紀後半代の須恵器まで、古墳時代の幅広い年代のものが含まれている。ただ、いずれも磨滅した小片が

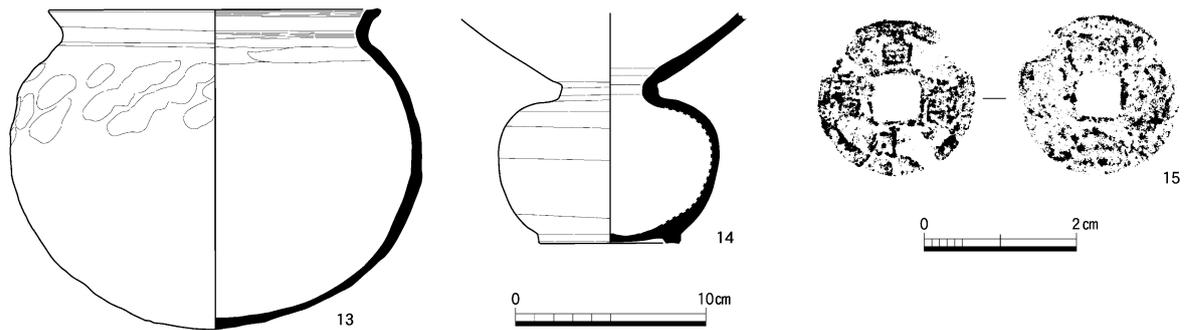


図32 2区柱穴68出土遺物実測図(1:4)、銭貨拓影(1:1)

多く、図示できた遺物は少ない。土師器高杯脚部(9)は5世紀代、須恵器杯蓋(10)は6世紀中頃、須恵器杯身(11)・須恵器高杯(12)は6世紀後半頃のものである。

柱穴68出土遺物(図32、図版9)土師器、緑釉陶器、銭貨がある。9世紀後半代の遺物である。土師器甕(13)は口径17.5cm、器高17.0cm、胴部最大径は体部のほぼ中央にあり21.6cmである。「く」の字状に外反する口縁端部は短く外へ引き出されており、端部内側は稜になる。短い頸部の内外面はナデ調整されているが、体部は成形時の指頭圧痕が凹凸に残っている。内外の底部周辺は使用により煤が付着している。緑釉陶器唾壺(14)は上半の皿端部が欠損するが、下半壺の胴径11.6cm、残存高は12.2cmある。浅いケズリ出し高台で、壺の体部外面は部分的にケズリ調整される。壺と皿部の頸部内面には接合痕が残る。胎土は須恵質灰白色で、薄い緑釉が全面に施されているが、釉調はムラがあり均一ではない。貞観永寶(870年初鑄)(15)は土師器甕の内底部に表を上に乗かれており、表面が白灰色化しかなり風化している。なお、甕や唾壺内の埋土を取上げ水洗篩別したが、埋納遺物と推定できるものは含まれていなかった。

柱穴74出土遺物(図33)土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがある。9世紀後半頃の遺物である。須恵器甕(19)は底部が据えられた状態で検出したが、口縁部を含む上半部は無く、削平されたものと思われる。土師器杯(16)、緑釉陶器皿(17)、灰釉陶器椀(18)はいずれも小片で埋納に関連する遺物かどうかは不明である。

柱穴97出土遺物(図34、図版9)土師器、須恵器などがある。須恵器甕が中心で、供膳形態の食器類は少ない。9世紀中頃から後半の遺物である。須恵器杯(20)は口径13.4cm、器高4.1cm、ロクロ成形で高台は付かない。須恵器甕は口縁部の形状や胎土の違いから3

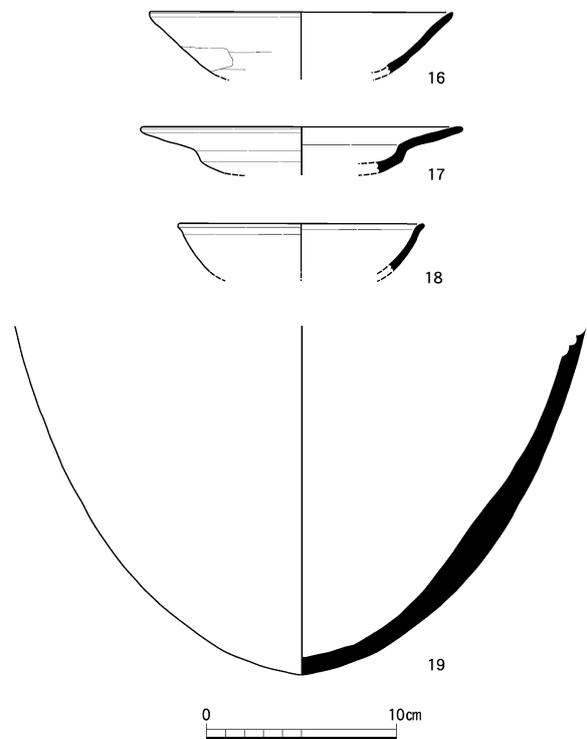


図33 2区柱穴74出土遺物実測図(1:4)

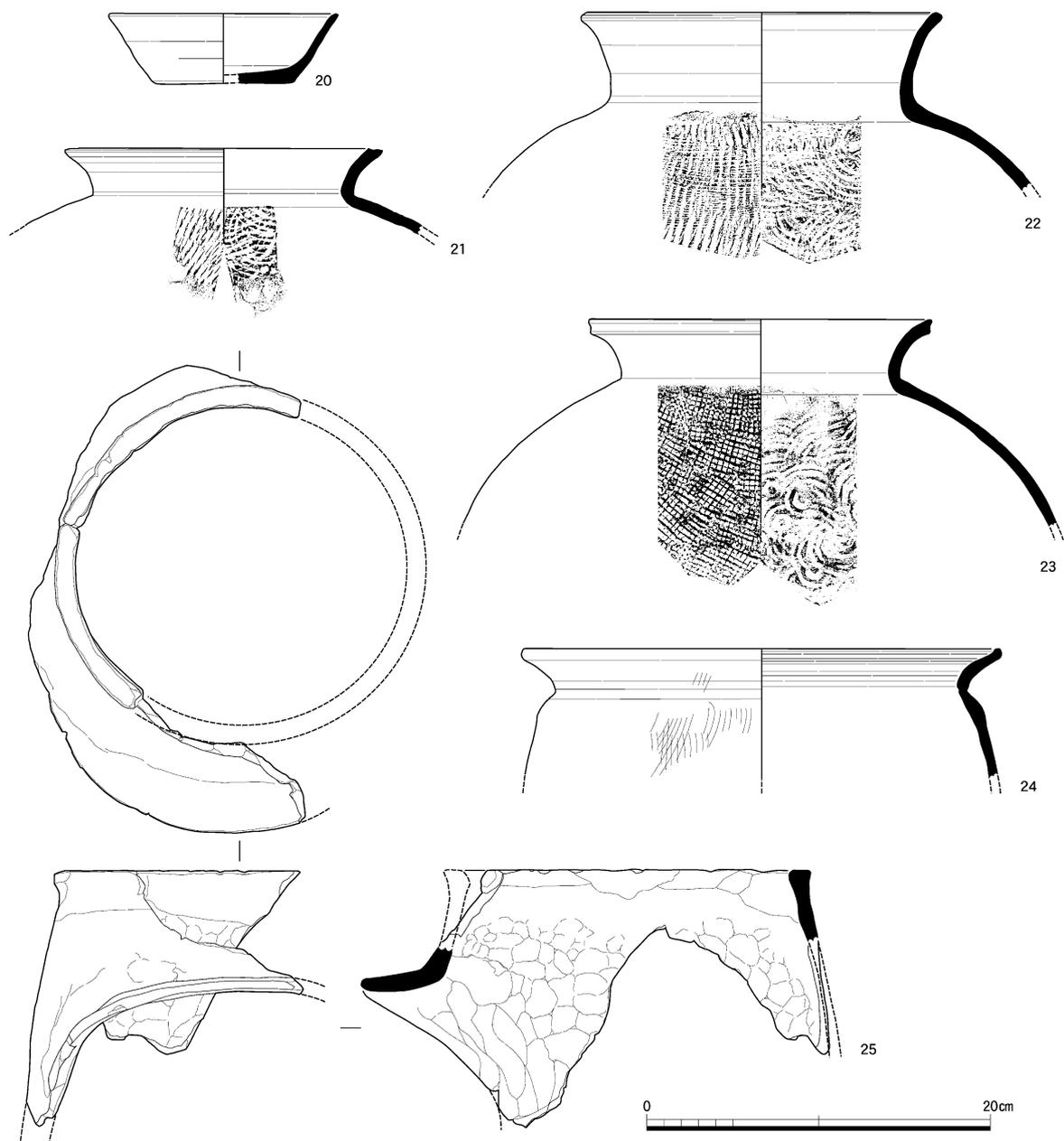


図34 2区柱穴97出土遺物実測図(1:4)

個体分出土している。(21)は口径18.5cmで、口縁部の破片である。(22)は口径21.0cmに復元できる。焼成は良く、外面は自然釉が掛かる。(23)は口径20.0cmで、外反する口縁端部を上部に引き出し稜をつくる。外面は格子タタキ、内面は同心円文である。胎土は橙灰色で、焼成は甘い。須恵器甕はいずれも口縁部から体部上半のもので、体部下半部分は出土していない。土師器類は甕(24)と移動式竈(25)がある。24は口径28cmに復元したが、残存率が低く不確かである。口縁と頸部外面の境を強くナデ、「く」の字状に外反する口縁端部は内側に丸く収める。焼成が悪く、調整痕はほとんど磨滅している。25は移動式竈の破片で、筒状の体部上半と罎状の開口部分の一部がある。上部にかけてやや肥厚させ、端部を平坦にする。罎部分内側を板状粘土で補強する。胎土は明褐色で、白色の砂粒が多く混入する。焼成は良いが、被熱で外面が薄く剥落している。

上辺端部や内面に煤が付着している。

土坑 102 出土遺物（図 35、図版 9） 遺構の残存状態が浅く、出土した遺物は、土師器杯 1 枚と須恵器甕片、棒状鉄製品の破片のみであった。土師器の杯（26）は、口径 14.0 cm、器高 3.3 cm である。焼成がよくないため内外面とも剥落面が多いが、体部外面にケズリ痕が残る。9 世紀中頃の遺物である。

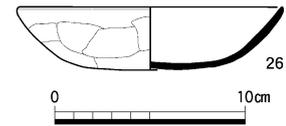


図 35 2 区土坑 102 出土遺物
実測図（1：4）

柱穴 124 出土遺物（図 36、図版 9） 出土遺物には土師器、黒色土器、須恵器、瓦などがある。遺構の性格を考慮してほとんどの出土遺物を図示したが、必ずしも全てが埋納に関連する遺物とは考えられない。9 世紀中頃の遺物である。土師器皿（27）は口径 15.0 cm に復元したが、小破片であり推定値である。また、内外面ともに表面が荒れており、調整などは不明である。（28）は土師器杯で、口径 14.0 cm、器高 3.3 cm である。口縁はわずかに外反し、端部は丸く収める。外面はケズリ、内面から口縁端部はナデ調整。土師器の小型甕（29）は口径 14.0 cm、器高 12.9 cm である。器壁が 7～9 mm と比較的厚く、口縁部は短く外反しそのまま丸く収める。外面は荒れて調整は不明であるが、内面はハケ目調整痕が残る。使用により底部に剥落と煤の付着がみられる。土師器の罎甕（30）は口径 19.6 cm で、残存する部分では罎が全て欠損しており、2 次的に罎を打欠いて使用された可能性もある。白色の砂粒を多く含む粗い胎土で、体部下半は黒斑し口縁付近は被熱により赤褐色を呈する。土師器甕（31）は口径 29.0 cm である。体部外面と口縁部内面は粗いハケ目、体部内面と口縁部外面はナデ調整である。体部外面に厚く煤が付着する。（32）は移動式竈の正面上端部である。砂粒が多く混入する明赤褐色の粗い胎土である。上面の端部付近はヘラケズリによる面取り痕が残るが、外面のハケ目は器壁が荒れており痕跡的である。罎は外側に折り曲げて成形され、内側は補強の粘土を圧着している。（33）は黒色土器の杯である。小破片で、とくに口縁端部の残存率が悪く、口径は不確かである。内外面とも器壁が磨滅しており、調整痕は残っていない。黒色土器の甕は 2 個体あり、（34）は口径 12.2 cm に復元できる。焼成が悪く内外面とも表面が剥落し、調整などは不明であるが、内面に幅 2 mm 程度のミガキ痕がわずかに残る。（35）は口径 12.4 cm、器高 9.7 cm のほぼ完形の製品である。底部は平底で安定はよい。内外面はやや幅の広いミガキで、口縁部はナデ調整される。外面底部周辺に煤が付着している。須恵器壺（36）は胴部径が 14.8 cm、頸部から上は欠損する。外面は粗いヘラケズリで、平底である。器壁が厚く、底部と体部立ち上がり部分の継目も雑である。良く焼き締まっており、肩には灰が被る。須恵器甕（37）は口径 22.5 cm で、口縁は外反し端部に平坦面を作る。平坦面にほぼ同じ口径で重ね焼きの痕跡がみられる。外面は平行タタキ、内面は同心円文が残る。丸瓦（38）は凸面縄タタキ、凹面布目で、端部はヘラケズリ。灰色の比較的精良な胎土で、焼成はやや軟質である。27・33・34 の土器類は、いずれも小破片で表面の風化も進んでおり、38 の丸瓦とともに埋納に直接関連する遺物かどうかは不明である。

柱穴 128 出土遺物（図 37、図版 10） 須恵器蓋（39）は口径 16.5 cm、器高 2.5 cm で胎土は比較的精良である。ロクロ成形でナデ調整され、下端は下に引出され断面三角形の稜を作る。内面

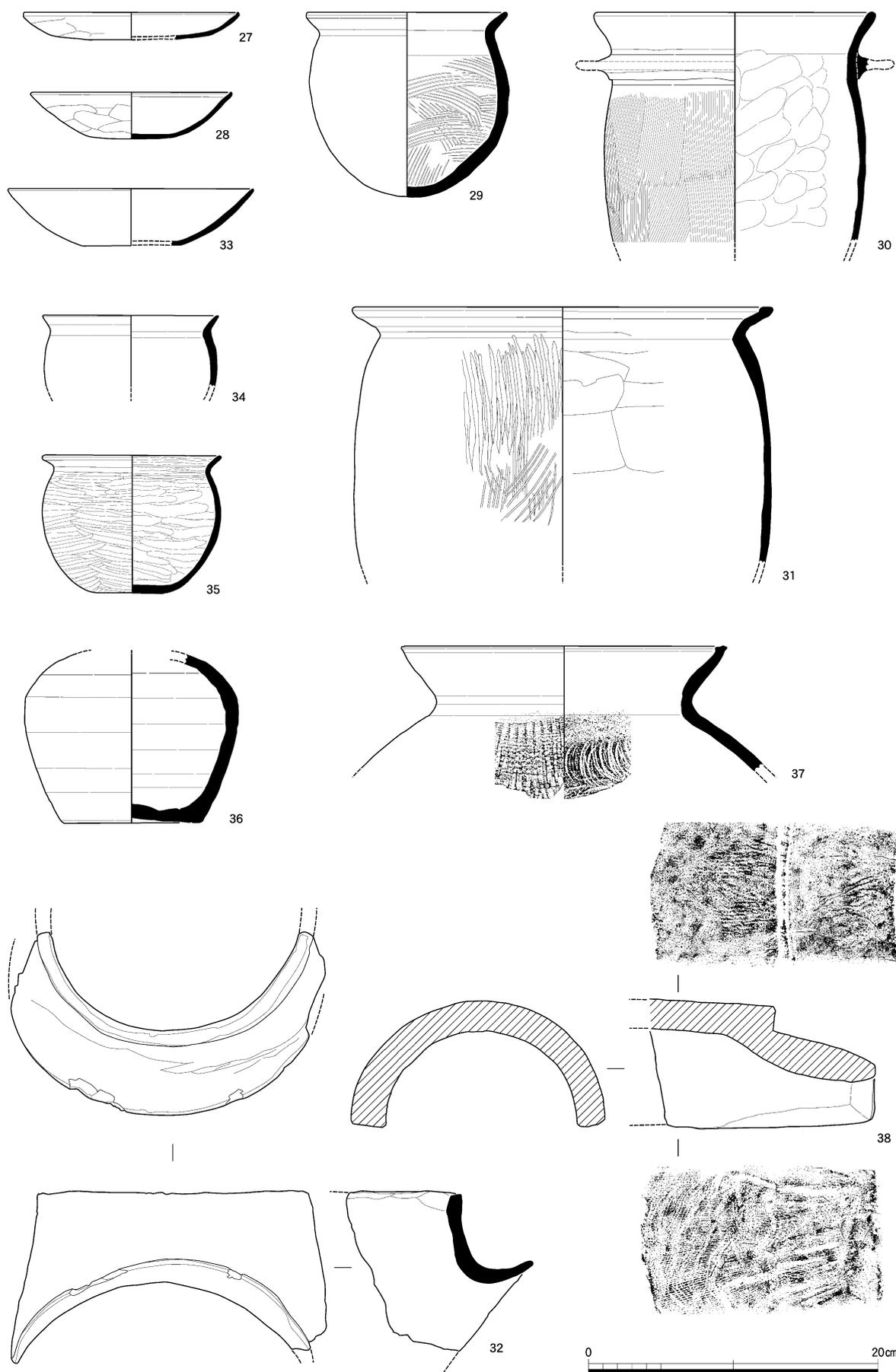


图 36 2区柱穴 124 出土遗物实测图 (1 : 4)

を除いて調整は雑で、焼成もやや甘い。ほぼ
 完形である。(40・41)は須恵器甕の口縁部
 と底部である。焼成は良く、焼成時に窯の床
 面に直に置かれた痕跡と思われる藁状の圧痕
 があり、転倒を防ぐ楔形のハマ痕が残る。胎
 土や内外面のタタキ目が近似しており、同一
 個体の可能性が高い。同じ個体であれば、卵
 形の丸底甕になると推定される。

落込み 56 出土遺物 (図 38、図版 10) 土
 師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、
 瓦類、木製品などが出土した。ただ、遺構規
 模に対して遺物の出土量が少なく、小破片が
 主で図示できた資料は少ない。9 世紀前半か
 ら中頃の遺物が主体である。土師器皿 (42・
 43) は、42 が口径 15.7 cm、器高 1.9 cm で、
 口縁部は外反し端部は小さく丸く収める。内
 面と口縁部外面はナデ調整される。均一な灰

白色胎土で微細な金雲母片が混入する。43 は口径 15.9 cm、口径 2.5 cm である。斜に体部が立ち
 上がり、口縁端部はそのまま丸く収める。胎土は灰白色で焼成はよい。外面は体部ケズリ、底部
 は粗いナデで、内面はナデ調整である。(44～47) は土師器杯である。口径 13.5～15.2 cm、器
 高 2.9～3.4 cm で、口縁はわずかに外反し、端部は丸く収める。いずれも内面から口縁部外面ま
 でナデ調整、体部外面から底部は指頭圧痕が残る。胎土は灰白色で、外面表に橙色の斑がみられる。
 土師器鉢 (48・49) は 48 が口径 22.4 cm、器高 5.9 cm、49 が口径 22.4 cm、器高 6.7 cm あり、高
 台高が違うがほぼ同法量である。どちらも内面はナデ、外面は高台近くまでケズリ、高台内はナ
 デ調整される。口縁はわずかに外反し、端部は内側に小さく丸く収める。胎土は均一な灰黄色で、
 焼成はやや甘い。黒色土器鉢 (50) は口径 17.6 cm の鉄鉢型である。体部から内湾して立ち上がり、
 端部はそのまま丸く収める。体部の最大径付近より上と内面はやや粗いミガキ、体部外面下半は
 雑なケズリのちナデ。須恵器壺 (51) は底部径 13.1 cm、残存高 21.1 cm で頸部から上が欠損する。
 胎土は灰色で焼成は良く、肩部には灰が被る。平底で、胴部の器壁は比較的均一で、時計回りの
 ロクロ成形である。軒丸瓦 (52) は複弁蓮華文で、外区の内縁に圏線が巡り珠文は大きい。灰色
 胎土で、やや軟質である。時期は平安時代前期である。

落込み 56 の泥土層からは、木の枝や樹皮、種実などの自然遺物のほかに、加工痕のある木片も
 出土した。木製品 (53・54) は両端もしくは一端が焼けており付木と判断した。53 は長さ 12.8 cm で、
 両端部が焼け焦げている。54 は長さ 23.8 cm で上端が焼けており、下方は欠損している。いずれ
 も材を割いた状態であり、薪として利用されたものかも知れない。杭 (55) は先端部で約 30 cm

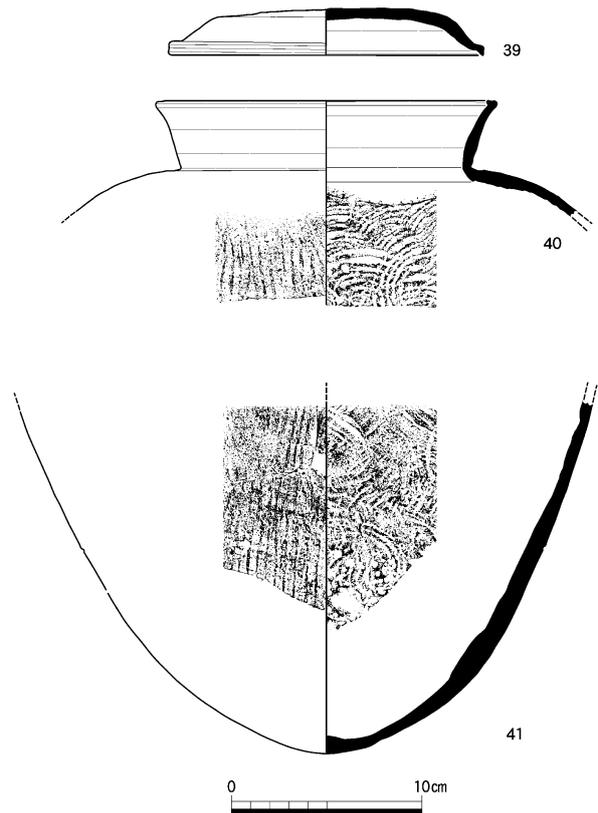


図 37 2 区柱穴 128 出土遺物実測図 (1 : 4)

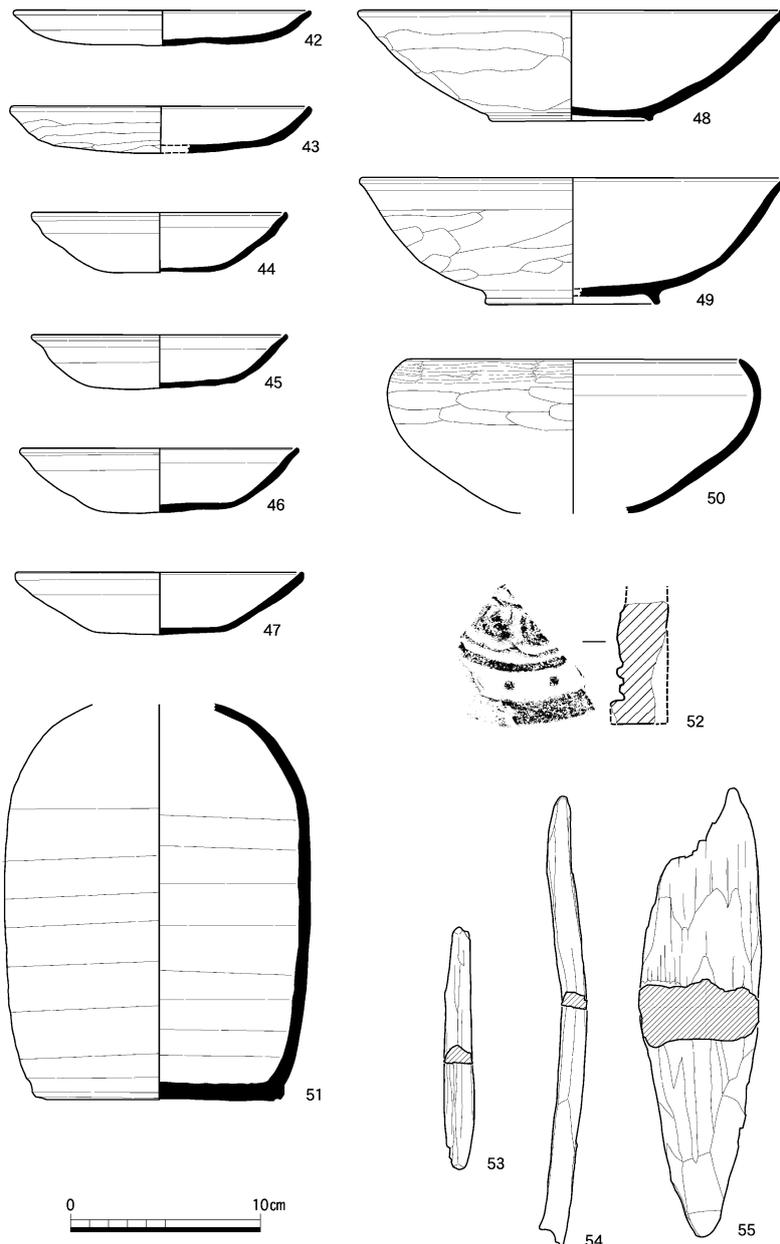


図38 2区落込み56出土遺物実測図(1:4)

程度残存している。断面は長方形で、特に目立つ加工痕は観察されず、先端部のみ尖らしている。

土坑67出土遺物(図39、図版10)土師器、須恵器、灰釉陶器などがある。9世紀中頃の遺物が主体である。土師器皿(56)は口径13.6cmで、外面底部と浅い体部にナデによる強い屈曲部を持つ。灰白色の胎土で焼成は甘い。土師器杯(57~61)は口径13.0~16.0cm、器高3.0~3.5cmで、内面と口縁部の外側はナデ調整される。このうち、58の内面底部には焼成前の「+」字状の細い線刻が残る。土師器杯(62)は口径17.0cm、器高3.2cmある。外面にヘラケズリ、内面はナデ調整である。I期新のやや古い様相で、9世紀前半のものである。土師器甕(63)は

口径28.8cmと大型で、口縁部は肥厚しながら「く」の字状に外反する。外面は粗い刷毛状工具で、頸部直下から調整し、内面はタタキ成形の後、上半部に幅の広いヘラケズリとナデ調整する。胎土は砂粒を多く含み灰黄色を呈し、焼成は良い。須恵器蓋(64)は口径3.7cm、残存高3.7cmで、天井部のケズリとナデ調整がやや粗い。端部は下方に引出し、外面に比較的鋭い稜線が巡る。胎土は灰色で焼成は良い。内面に墨が付着しており、硯に転用された可能性がある。須恵器杯(65)は口径13.0cm、器高3.3cmで、底部を除きナデ調整。胎土は灰白色で、焼成はやや軟質である。須恵器鉢(66)は口径23.8cmで、口縁部の破片である。胎土は比較的緻密で、焼成は良い。灰釉陶器鉢(67)は口径20.7cm、器高6.2cmで、口縁部は強く外反する。外面はロクロ目が残り無釉であるが、内面は刷毛状のもので比較的丁寧に灰釉が塗られている。胎土はやや暗い灰色で、白色砂粒が混入する。なお、この灰釉陶器鉢の埋土には、器壁と接する面がほぼ全面に暗赤褐色を

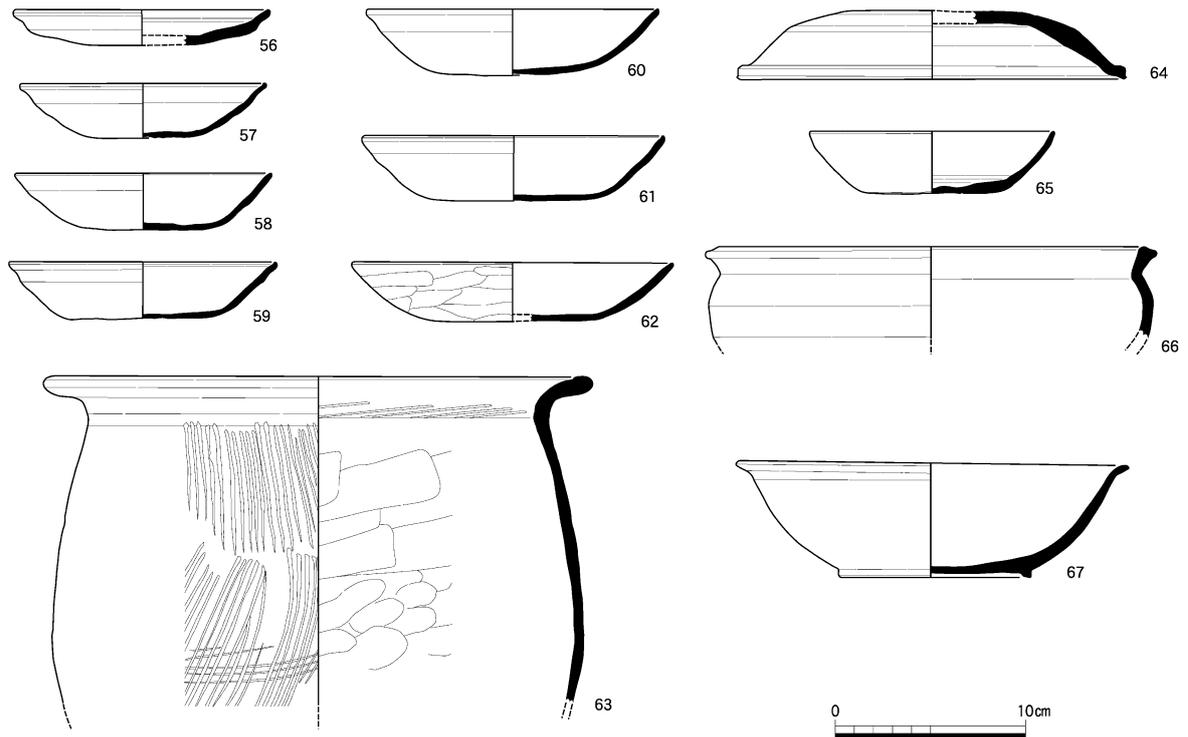


図 39 2区土坑 67 出土遺物実測図（1：4）

呈しており、何らかの顔料が鉢底に付着していたことが窺えた。分析の結果この顔料はベンガラ
の一種で、「パイプ状ベンガラ」と確認された。

溝 58 出土遺物（図 40）瓦を中心に、土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、
輸入陶磁器などがある。瓦以外の遺物は、小片が多く図示できたものは少ない。9世紀半ばから
末頃の遺物である。須恵器壺（71）は高台径 14.5 cm で、砂質の灰色胎土で焼成は良い。緑釉陶
器碗（68）は径 6.6 cm の浅いケズリ出し高台で、高台内は無釉である。胎土は灰色須恵質で、焼
成は良く、緑釉は薄く均一である。青磁碗（69）は中国越州窯系の製品で、ケズリ出しの蛇ノ目
高台である。釉調は灰オリーブ色で全面に施釉される。高台底部に目痕がある。輸入陶磁器には、
このほかに長沙窯系の黄釉陶器片、白磁片がある。灰釉陶器碗（70）は高台径 9.0 cm で、内面に
のみ施釉される。平瓦（72）は残長 20.7 cm、幅 12.7 cm で、凹面に布目痕、凸面は縄目タタキ痕、
端部はケズリ調整である。

溝 61 出土遺物（図 40）土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などが出土して
いる。9世紀末頃までの遺物である。土師器皿（73・74）はどちらも小片を復元して図示した。
73は口径 12.8 cm、器高 2.5 cm で、74が口径 16.4 cm、器高 2.3 cm である。内面と口縁部はナデ、
外面はオサエ痕が残る。土師器甕（75）は口径 17.6 cm に復元できる。口縁部はナデ、体部外面
はオサエもしくは無文のタタキ。外面に薄く煤が付着する。緑釉陶器（76）は碗の底部で、全面
施釉されるが、軟質で釉の剥落が目立つ。灰釉陶器碗（77）貼付け高台の底部である。外面は無釉、
内面は均一で比較的厚く釉が施される。

溝 60 出土遺物（図 40）溝 61 と同様の遺物が出土しているが、出土量は少なく小片が中心で

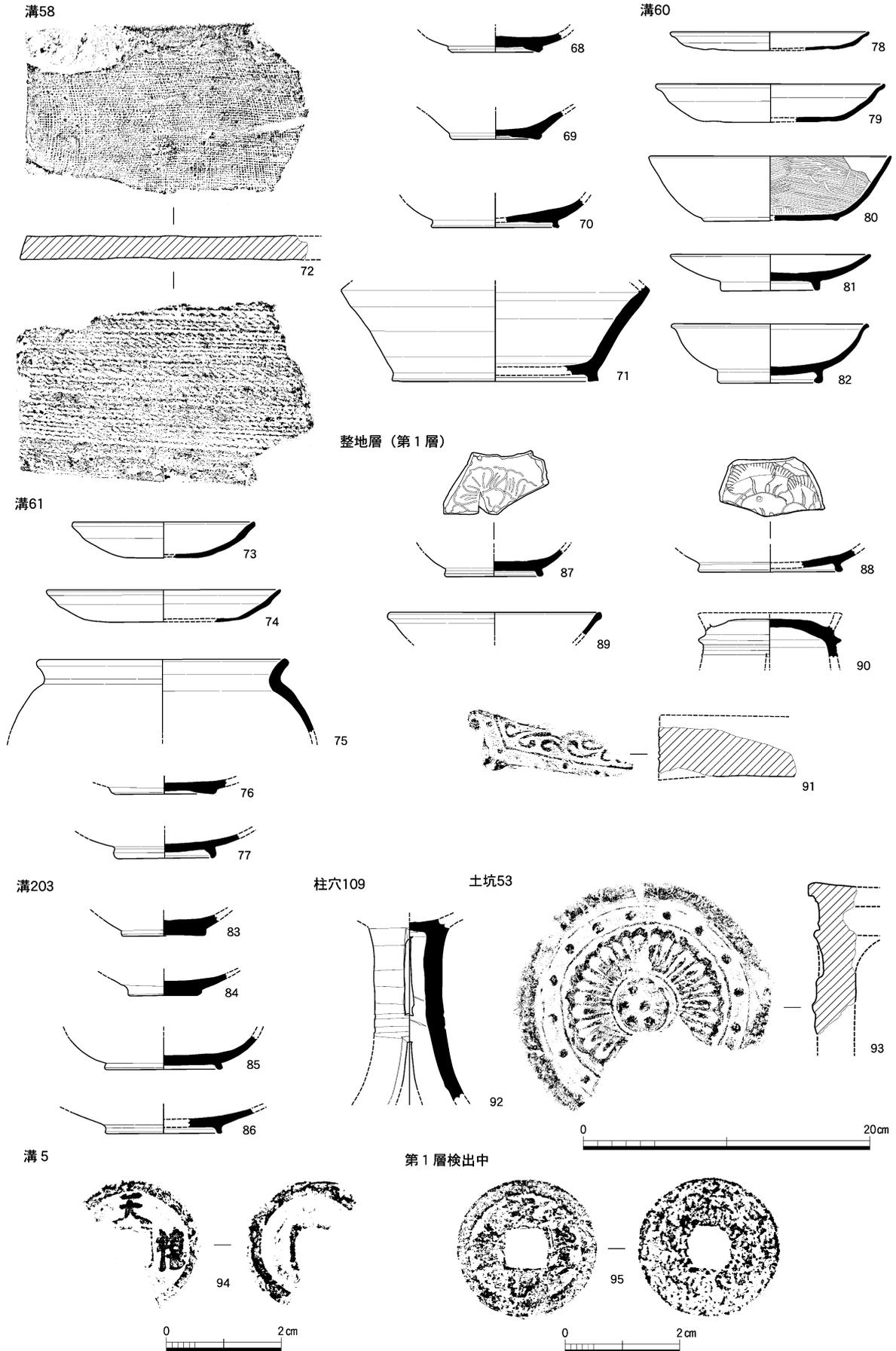


図40 2区整地層・その他の遺構出土遺物実測図(1:4)、銭貨拓影(1:1)

ある。また、溝の北肩が溝 61 を切るが、時期差は認められなかった。土師器皿（78・79）は 78 が口径 13.9 cm、器高 1.4 cm で、79 が 16.0 cm、器高 2.7 cm である。法量は違うが、どちらも斜に立上がる体部は口縁端部で短く外反し、端部は内側に丸く収める。いずれも口縁端部の内外面に幅広く煤が付着しており、灯明皿として使用されたものとおもわれる。黒色土器椀（80）は、口径 17.0 cm、器高 4.6 cm で貼付け高台である。外面は体部がケズリ、高台内と口縁部はナデ、内面は丁寧なミガキで体部にラセン状の暗文を施す。緑釉陶器皿（81）は口径 14 cm、器高 2.6 cm である。体部は高台脇からゆるく内湾して延び、端部はそのまま丸く収める。土師質の胎土は浅黄色で、全面に薄く釉が掛かる。灰釉陶器椀（82）は口径 13.8 cm、器高 4.2 cm である。内外面の底部付近を除いて、薄く施釉される。高台部の貼付けが雑で歪み、ナデ付け痕が残る。

溝 203 出土遺物（図 40）土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦などが少量出土した。緑釉陶器（83・84）はいずれも底部破片で平底である。胎土は土師質で軟らかく、釉は剥落が激しい。84 は糸切未調整の高台で、僅かに残存する体部の立上がりりが左右不均衡であることから、耳皿であろうとおもわれる。灰釉陶器（85・86）は 85 が椀で、86 が皿である。椀は外面無釉で内面は釉が刷毛塗りされ、目痕が 3 箇所残る。皿も外面は無釉で、内面に薄く灰釉が掛かる。9 世紀後半～末頃の遺物である。

整地層（第 1 層）出土遺物（図 40）整地層埋土には平安時代前期から平安末～鎌倉時代初頭にかけての土師器、須恵器、瓦器、陶磁器類など幅広い年代の遺物が出土した。ただ、整地層という遺構上、小片や磨滅した二次堆積をおもわずものがほとんどで、図示したものは平安時代前期の遺物で、平安時代末期～鎌倉時代初頭の遺物に図示できるものはなかった。緑釉陶器（87・88）は内面に陰刻花文が施された椀で、全面施釉されている。どちらの製品にも高台内と内面に

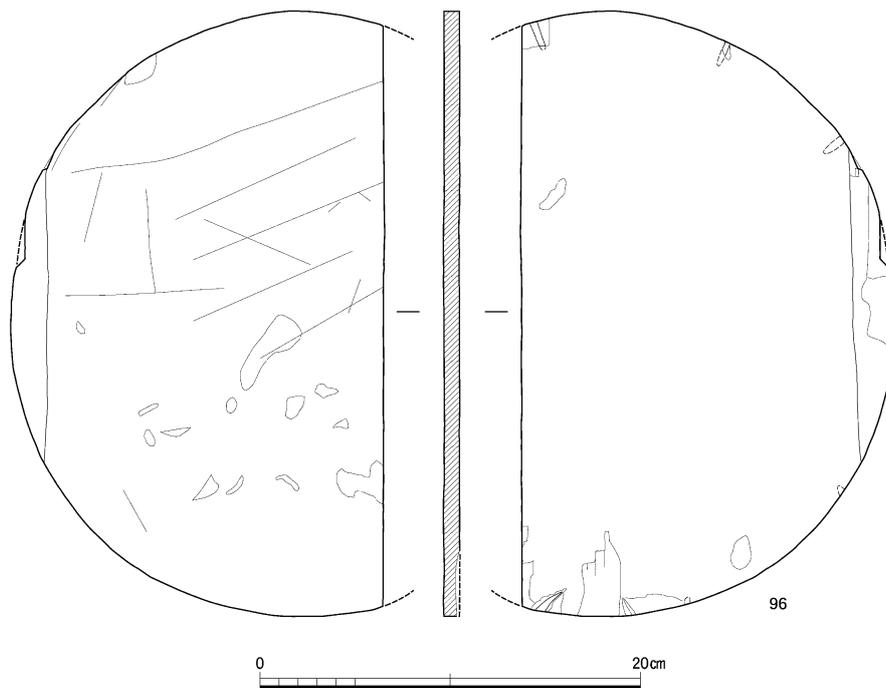


図 41 2 区柱穴 206 出土遺物実測図（1：4）

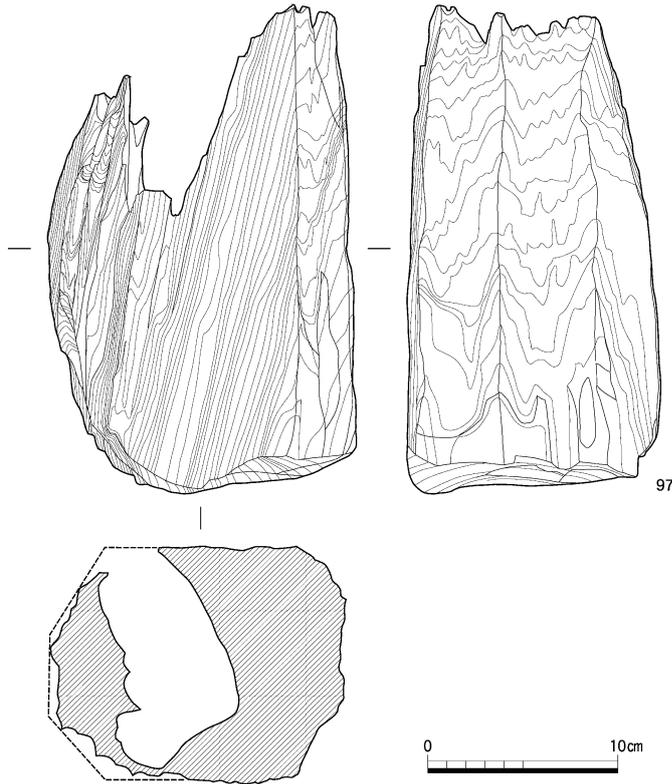


図42 2区柱穴126出土柱根実測図(1:4)

を图示した。須恵器高杯(92)は長脚2段透かしの脚部で、柱穴109の掘形より出土した。6世紀後半～末頃とおもわれる。複弁蓮華文軒丸瓦(93、図版10)は、中房界線内の蓮子が1+6、8弁の複弁でY字状の間弁が付く。外区の珠文は推定16である。瓦当裏面に逆「U」字状の溝を付け、丸瓦を差し込む。胎土はにぶい黄橙色で砂粒を含み、表面は黒灰色を呈する。平安時代前期の土坑53から出土した。西寺跡出土瓦に同文のものがある¹⁾。銭貨(94・95)には近世の耕作溝5から出土した天禧通寶と整地層(第1層)検出中に出土した元豊通寶がある。いずれも北宋銭である。木製品には、柱穴206出土の曲物底板(96)(図41)と柱穴126出土の柱根(97)がある(図42)。96は最大径32.1cm、厚さ0.8cmある。側面に竹釘が5箇所残っており、曲物を竹釘で結合する円形曲物容器の底板とした。表面に使用痕とおもわれる細かいキズがある面(実測図左)が外面底部と推定される。97は断面長方形の柱材の4隅を大きく面取りして八角形にした柱である。腐植が進み判然としないが、底部は平坦に加工されていたものとおもわれる。

註

1) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 No.367～370

目痕が付く。輸入白磁椀(89)は口縁端部が外に丸く小さく肥厚するもので、邢州窯系の製品である。須恵器円面碗(90)は碗面から脚部にかけての薄片で、碗面は使用により平滑になっている。唐草文軒平瓦(91)は外行するやや扁平な3重唐草文が3回転すると考えられる。瓦当面の上・下周縁部を欠く。胎土は均一で砂粒は少なく暗灰黄色を呈し、焼成は軟質である。

その他の出土遺物(図40～42)その他の遺物には、遺構に伴わない土器類、瓦類、銭貨、木製品などがある。それらのうち残存状態の良好なもので、報告すべきもの

5. まとめ

今回の調査の結果、平安時代前期の3時期にわたる建物配置や町内通路などを検出し、当地域の変遷を知ることができた。以下では、その成果を宅地の変遷を中心に記述し、ついで町内通路については、既往調査の成果と合わせて簡単にまとめる。

(1) 右京六条二坊三・六町の変遷

三町宅地内では、北東部に古墳時代後期の自然流路209が存在し、その上部は落込み56として湿地状の堆積をしていた。9世紀中頃になって落込み56を整地し、宅地として整備されたことがわかった。

9世紀中頃から後半頃の間は大まかに3時期の建物配置があることがわかった。掘立柱建物1と4、2と3がそれぞれ重複関係にあるが、掘立柱建物1と3の一部の柱穴には、柱抜き取り後に土器埋納がなされていることから、これらの建物が一時期古いと考えられる。掘立柱建物5は規模が大型であることや他の建物との位置関係から古い時期のものと考えた。これらの建物の先後関係から、1期は掘立柱建物1・3・5、土坑67・125があり、2期には掘立柱建物2・4・6・7があり、3期には溝58・60・203などがある。建物の配置関係では、1・2期の掘立柱建物5・7が東一行と東二行の境に、さらに建物5に関しては北三門と北四門の境に位置し、また、2期の掘立柱建物4は北二門と北三門の境に位置していることから、宅地規模が大きいことが推測できる。当初の宅地規模としては、北東部の少なくとも四分の一町以上もしくは二分の一町を占有していたとみられる。9世紀中頃から後半頃には建物配置の変更を含めて、積極的に宅地としての利用がなされていた。しかし、3期になると、北二門と北三門の境には、2条の並行する溝58・60を側溝とする通路が造られ、それまでの宅地は分割されていき、建物などの顕著な遺構はみられなくなる。

一方、六町宅地内では、9世紀中頃から後半頃の間は2時期の変遷がある。先行して掘立柱建物1が成立し、後に2区3期と同時期に北二門と北三門の境に2条の並行する溝9・39を側溝とする通路が造られ、土地を分割していくことがわかった。それまでの宅地が、周辺の状況変化などからその利用方法が変化していったとみられる。

三・六町ともに土地が細分されていき、9世紀末頃には遺構・遺物とも検出されなくなり、10世紀の早い段階で荒廃したことが窺える。このような状況は周辺の調査成果と同様であり、この周辺の右京域に共通する様相として、捉えることができよう。

また、三町内では平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて大規模な整地作業が行われたことがわかった。しかし、当該期の建物などに関連する遺構は検出できなかったことから、整地の目的は不明である。右京域では平安時代前期に放置された地域が、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて再開された事例¹⁾があり、当地域もその一つとなる可能性がある。

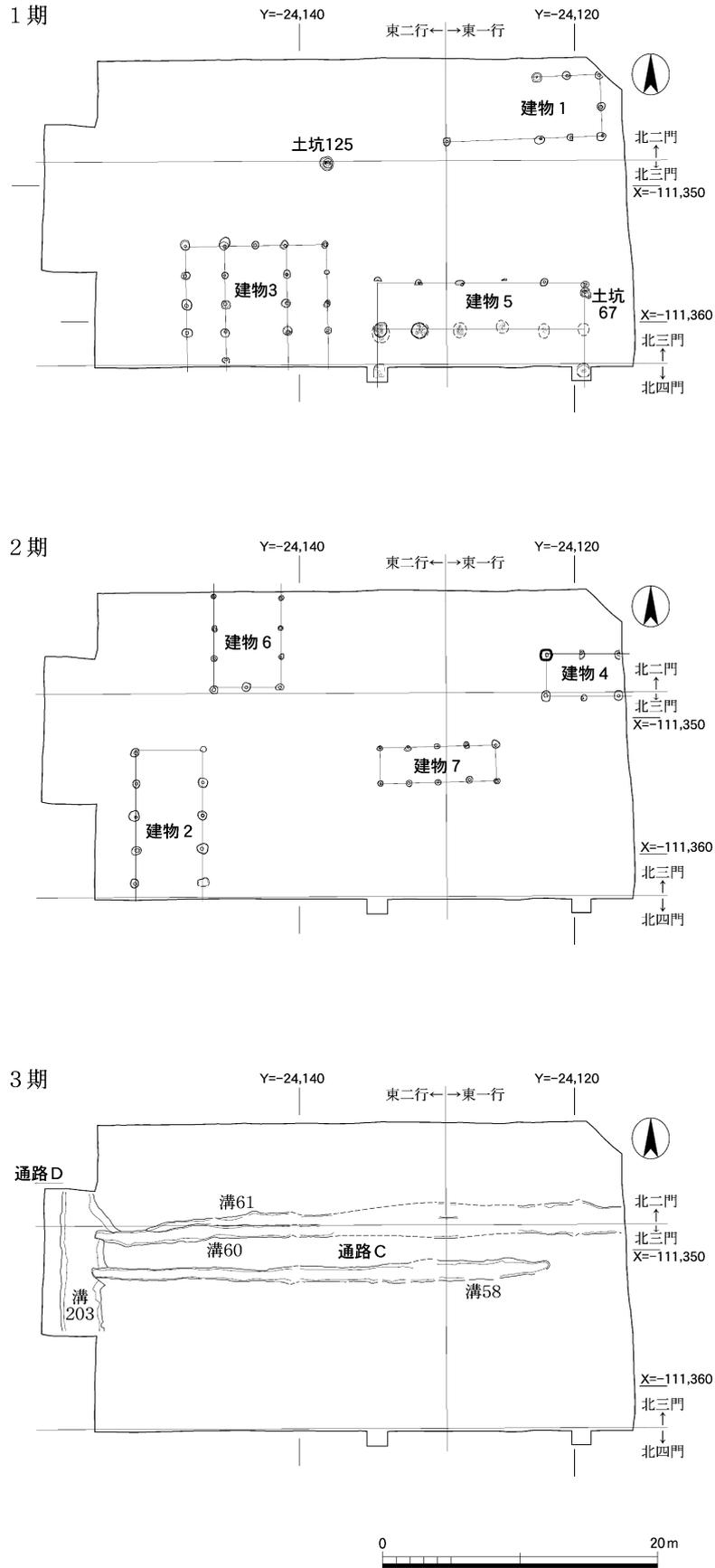
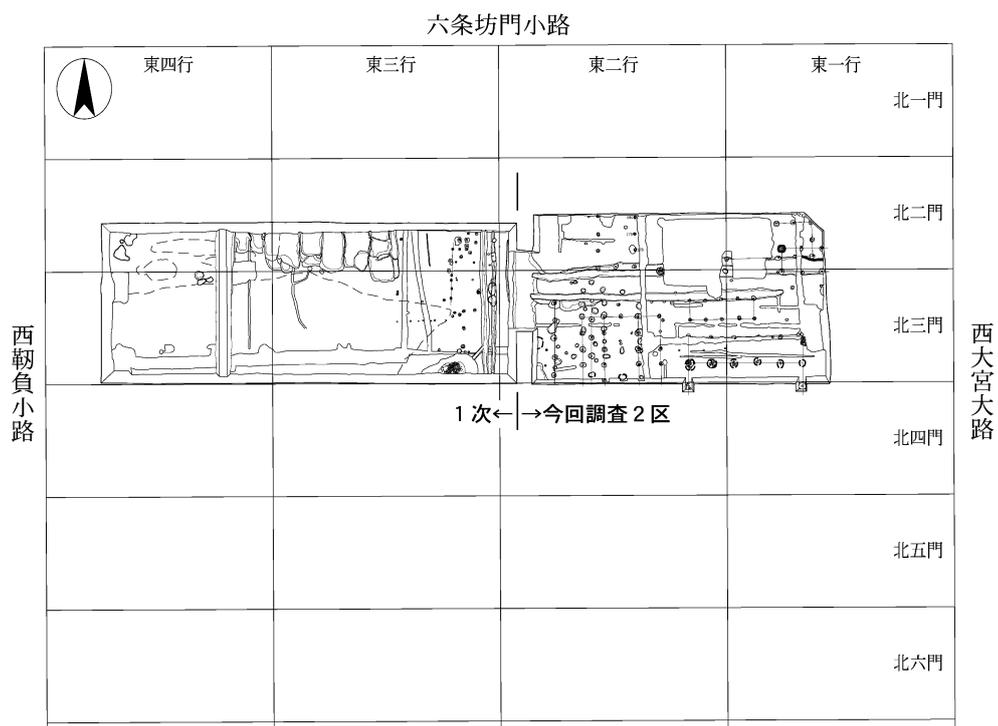


图 43 2区第2面变遷図 (1 : 500)

右京六条二坊三町



右京六条二坊六町

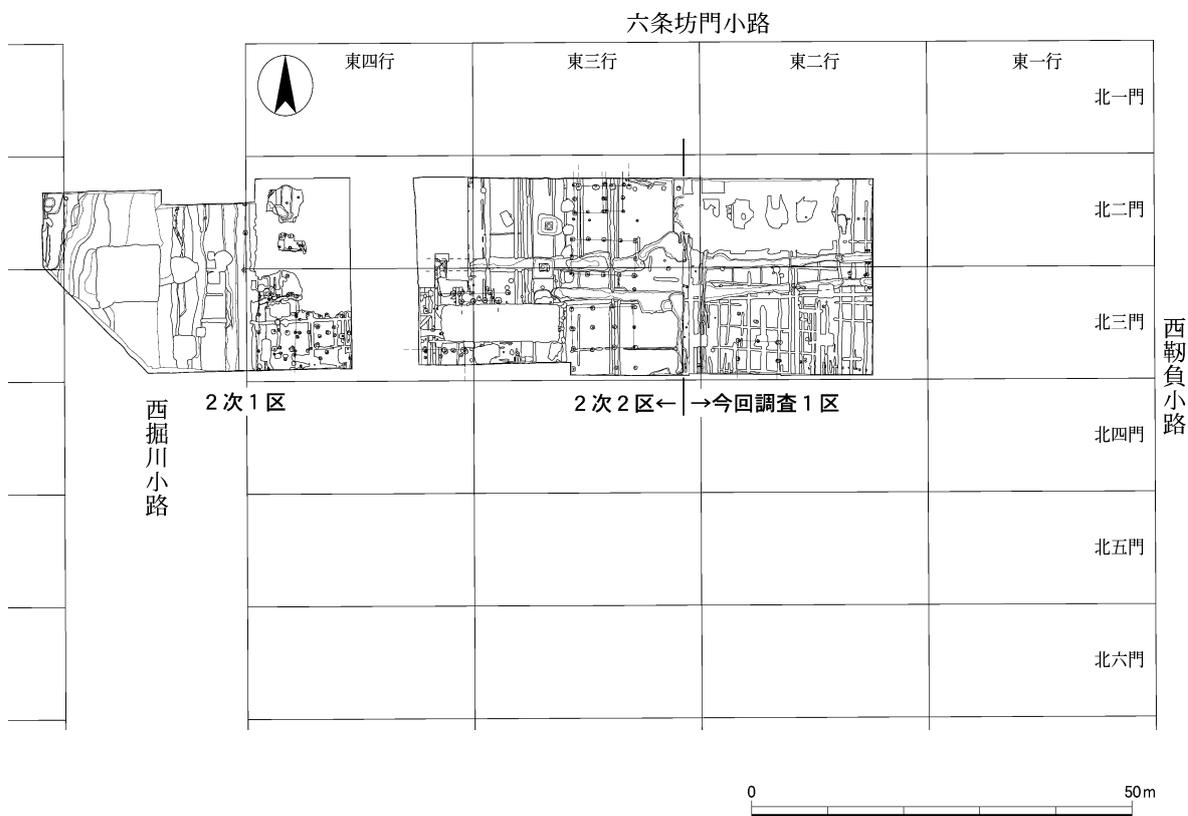


図 44 四行八門内における調査区 (1 : 1,000)

(2) 小径に関して

今回の、平安京右京六条二坊三町・六町における第3次調査では、おもに平安時代前期の遺構を検出した。そのなかで東西方向もしくは南北方向の互いに並行する2条の溝に注目してみる。また、2006年度から五条通拡幅事業に伴う一連の調査で検出した溝についても再確認してみたい。

1区の溝9・39、2区の溝58・60など並行する2条の溝の間の部分はおおむね平坦であり、南北または東西方向に延びている。前述したように、これら2条の溝を両側溝とみることにより、この内側の空間を「通路」として考えた。

三町内では、2区の東西溝58・60の間が東西方向の通路Cとなり、その位置は三町の北二・三門境にあたる。さらに、1次調査の南北溝179と2区南北溝203の間が南北方向の通路Dとなり、その位置は三町の東二・三行境にあたる。ここでは、南北通路Dと東西通路Cは直角に接続し、東西通路Cは三町の西半には延びない。一方、六町内では、1区南北溝67と2次調査の2区南北溝44の間が南北方向の通路Aとなり、その位置は六町の東二・三行境にあたる。さらに、1区の東西溝9・39間が東西方向の通路Bとなり、その位置は六町の北二・三門境にあたる。これらは、2次調査の2区東西溝3・6、1区東西溝219と対応し、西堀川小路につながる。ここでは、南北通路Aと東西通路Bは直交している。

これらの遺構を考える上で、『延喜式』卷第四十二「左京職京程」²⁾の次のような記載に注目したい。「凡町内開小徑者。大路邊町二。廣一丈五尺。市人町三。廣一丈。自餘町一。廣一丈五尺」とあり、各町内には小径が設けられ、それぞれ径の数や広さが定められていたことがわかる。

今回検出した六町内の南北通路A・東西通路B、三町内の東西通路C・南北通路Dは、その位置や規模から「延喜式」に記載されている一町内に設けられた「小径」と考えられる。南北通路Aは六町を、南北通路Dは三町をそれぞれ東西に二分する小径、東西通路B・Cは各町を南北に四分する位置にある小径と考えられる。

平安京内では、四行八門境にあたる位置で溝の検出例が多くあるが、ここでは、10件の小径に関すると思われる並行する2条の溝を検出している例を挙げておく。これらを表4としてまとめ、図45にその検出地点を記した。

右京一条三坊二町（調査1）では、町の中心を南北に通る小径がある。溝96と溝202に挟まれた空間で、溝96は幅1.0m、深さ0.1～0.4m、溝202は幅1.5～2.2m、深さ0.1～0.5m、溝心々間の距離は3.5mある。

右京一条三坊十六町（調査2）では、町の中心を南北に通る小径がある。1号濠と2号濠に挟まれた空間で、1号濠は幅0.7～2.5m、深さ0.2～0.6m、2号濠は幅1.1～2.4m、深さ0.2～0.6m、溝心々間の距離は3.8～4.7mある。路は北で土御門大路につながる。

右京二条三坊十一町（調査3）では、町の中心を南北に通る小径がある。溝10と溝9に挟まれた空間で、溝10は幅0.3m、深さ0.2m、溝9は幅1.1m、深さ0.2～0.3m、溝心々間の距離は3.0～3.5mある。

右京三条二坊十五町（調査4）では、町の六・七門間を東西に通る小径がある。溝117と溝

118に挟まれた空間で、溝117は幅1.2m、深さ約0.2m、溝118は幅1.5m、深さ約0.3m、溝心々間の距離は3.3mある。

右京六条一坊五町（調査5）では、町の三・四行間を南北に通る小径がある。溝F023と溝F024に挟まれた空間で、溝F023は幅1.7m、深さ0.2m、溝F024は幅1.0m、深さ0.2m、溝心々間の距離は4.0mある。

右京六条一坊十三町（調査6）では、町の南北中心を東西に通る小径がある。東西溝3・4に挟まれた空間で、溝3は幅0.6m、溝4は幅0.6m、溝心々間の距離は2.6～2.8mある。

右京六条三坊四町（調査7）では、町の中心を東西に通る小径がある。溝21と溝20に挟まれた空間で、溝21は幅1.3m、溝20は幅1.5m、溝心々間の距離は4.0～4.5mある。路は東で道祖大路につながるとみられる。

右京六条三坊七町（調査8）では、町の中心を南北に通る小径がある。溝5409と溝5412に挟まれた空間5408で、溝5409は幅0.4～0.9m、深さ0.1m、溝5412は幅0.6m、深さ0.2m、溝心々間の距離は3.5～4.5mある。路は北で樋口小路につながる。

右京八条三坊七町（調査9）では、町の中心を東西に通る小径がある。溝4と溝5に挟まれた空間で、溝4は幅0.5m、深さ0.1m、溝5は幅0.8m、深さ0.3m、溝心々間の距離は約3.2mある。

左京四条一坊一町（調査10）では、町の中心を南北に通る小径がある。溝30と溝25に挟まれた空間で、溝30は幅1.4m、溝25は幅0.9m、溝心々間の距離は2.5mある。南で六角小路につながる。

以上の例から、平安京内で検出されている小径の大まかな傾向を列記し、さらに問題点を挙げておく。

小径には町を東西または南北の中央で二分するタイプが多く、検出した例からは南北方向に設けられた小径が多い傾向がみられる。その他には、今回の六条二坊三・六町や調査4・5などのように中央以外の四行八門制ラインに規制されている例がある。

今回の三町は東辺で西大宮大路に面し、六町は四辺が小路に面している。延喜式によれば、三町には2条、六町には1条の小径が開かれることになるが、六町では前述した様に南北小径A・東西小径Bの2条が検出されており、施工実態は延喜式の記載内容とは異なっているようにみえる。しかし、六町は西側で西堀川小路に接しており、道路幅が大路と同様の8丈を有することから、実質上の大路と捉えれば、小径は2条設けられても齟齬はないことになる。

いずれも検出した小径幅は、側溝心々間の距離がおおよそ2～4m、平均3.1mあり、路面幅1.5～3.2mあり、平均は2.7mであった。延喜式に記されている一丈五尺（4.5m）の小径幅は、道路幅を築地心々間の距離で記載することから、築地部分の距離を考慮すれば、検出した小径の幅は妥当とみられる。

小径の2条の側溝のうち一方が、四行八門ライン近くに位置しており、小径は概ねどちらか一方の宅地側に偏って施工されていることがわかった。これは施工誤差によるものとも考えられる

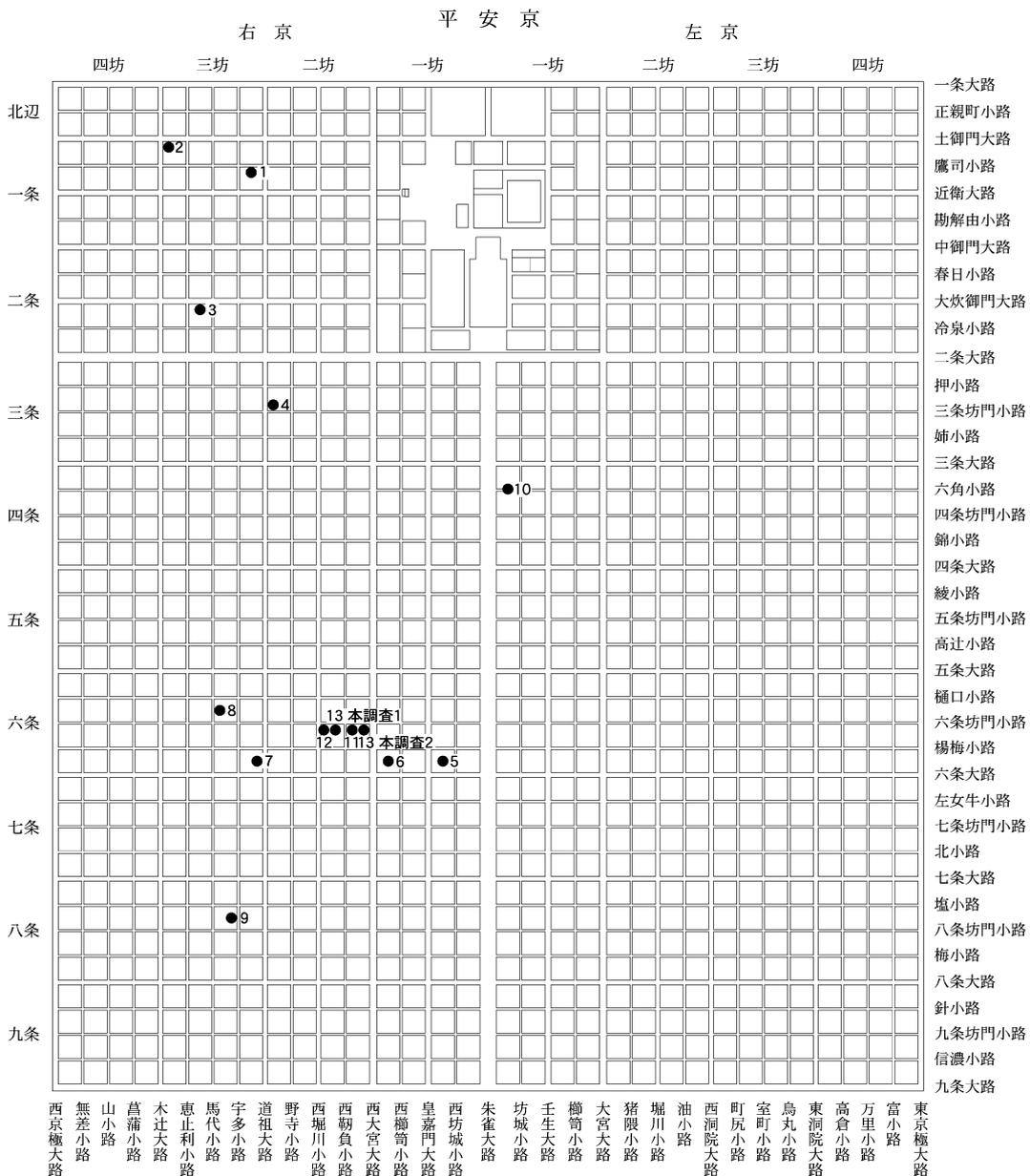
が、ほとんどの検出例にみられる状況であることを指摘しておく。

主に右京域において、小径により区切られた土地では、その後、必ずしも建物が建てられていないという状況がみられるため、宅地以外としての利用も想定できる

現時点では、類例の抽出が不十分であるが、左京域における検出例が少ない理由は、後世の遺構が多く重複することが主な原因と考えられる。

註

- 1) 2001年度の調査により、右京六条一坊六町内では池や御堂を備えた邸宅が検出されている。
 平尾政幸・山口 真・永田宗秀『平安京右京六条一坊・左京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年



※ 調査地点の番号は表4の番号と対応する。

図45 平安京内小径検出地点

表4 平安京内小径検出地点一覧表

番号	遺跡名	所在地	東西分割	南北分割	溝心々間	道路幅	検出長	面する街路	概要	文献
1	右京一条三坊二町	中京区西ノ京御興ヶ岡町1-2	○		3~4m	2~2.5m	南北20m	大路	町の東西中心に南北溝202、西約4mに南北溝96。橋の痕跡も確認。平安時代中期。	1
2	右京一条三坊十六町	右京区花園鷹司町113ほか	○		3.3~3.5m	2.5~3m	南北47m	大路	C区、町の東西中心に1号南北濠、東約4mに2号南北濠。北で土御門大路南側溝に続く。平安時代前期。座標未表記。	2
3	右京二条三坊十一町	中京区西ノ京小堀池町4-2ほか	○		2.5~2.8m	1.5~2m	南北19m	大路	町の東西中心に南北溝9、東2.5mに南北溝10。平安時代前期後半から中期。	3
4	右京三条二坊十五町	中京区西ノ京東中合町7		○	3.3~3.5m	2~2.3m	東西16m	大路	北六・七門境に東西溝118、南3.5mに東西溝117。平安時代前期後半から中期。	4
5	右京六条一坊五町	下京区中堂寺南町17ほか	○		4m	2.6m	南北7m	大路	東三・四行境界に南北溝F024、西4mに南北溝F023。平安時代前期。	5
6	右京六条一坊十三町	下京区中堂寺栗田町		○	3m	2m	東西31m	大路	町の南北中心に東西溝3、南3mに東西溝4。平安時代前期。	6
7	右京六条三坊四町	右京区西院溝崎町12ほか		○	3.2~4m	2~3.2m	東西23m	大路	町の南北中心に東西溝21、南4mに東西溝20。平安時代前期前半。	7
8	右京六条三坊七町	右京区西院追分町25-1、2	○		3.5~4.5m	2.5~3m	南北113m	小路	町の東西中心に南北溝5412、東約4mに南北溝5409。小径5408。溝は平安時代前期前半から4時期の変遷あり。	8
9	右京八条三坊七町	下京区七条御所ノ内西町68-1		○	3.2m	2.8m	東西7m	小路	町の南北中心に東西溝4、南約3mに東西溝5。平安時代前期、後期。	9
10	左京四条一坊一町	中京区壬生朱雀町8-2	○		2m	1.1m	南北15m	大路	町の東西中心に南北溝25・30。平安時代後期。平安前期には溝25の東2.5mに南北溝70あり。	10
11	右京六条二坊三町	下京区西七条東御前田町	○		-	-	南北19m	大路	町の東西中心に南北溝179。溝幅1.1m。東側溝は調査区外東。平安時代前期後半。	11
12	右京六条二坊六町	下京区西七条東御前田町、右京区西院南高田町	○	○	4.1m	2.5m	東西57m 南北19m	小路	2区、六町の北二・三門境界に東西溝3、南約3mに東西溝6（1区東西溝219）。六町の東西中心から西約3mに南北溝44。平安時代前期後半。	12
13	右京六条二坊三・六町	下京区西七条赤社町、西七条御前田町	○	○	3.3m	2m	東西38m 南北19m	大路・小路	1区、六町の北二・三門境界に東西溝9、南約3mに東西溝39。六町の東西中心に南北溝67。2区、三町の北二・三門境界に東西溝60、南約3mに東西溝58。三町の東西中央から東約3mに南北溝203。平安時代前期後半。	13

文献（表4 平安京内小径検出地点一覧表に対応する）

- 久世康博「平安京右京一条三坊」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998年
- 杉山信三・鈴木廣司「住宅公団花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報」『埋蔵文化財発掘調査概報集』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
- 中村 敦「右京二条三坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局 1985年
- 本 弥八郎「平安京右京三条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 梅川光隆・丸川義広他『平安京右京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1992年
- 平尾政幸「平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 平尾政幸・梅川光隆「平安京右京六条三坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 堀内明博『平安京右京六条三坊』平安京跡研究調査報告 第20輯 財団法人古代学協会 2004年
- 堀内明博・梅川光隆「右京八条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 南 孝雄・鈴木久男・清藤玲子「平安京左京四条一坊」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 小椋山一良『平安京右京六条二坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-25（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年
- 小椋山一良・布川豊治・能芝 勉・尾藤德行『平安京右京六条二坊六・十一町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-3（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうにぼうさん・ろくちょうあと							
書名	平安京右京六条二坊三・六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-14							
編著者名	小檜山一良・能芝 勉・尾藤徳行・布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ろくじょうにぼう 六条二坊 さんちょう・ろくちょうあと 三町・六町跡	きょうとししちぎょうく 京都市下京区 にしななじょうあかやしちよう 西七条赤社町～ にしななじょうおんまえだちよう 西七条御前田町	26100		34度 59分 46秒	135度 44分 02秒	2007年8月 21日～2007 年12月21日	1,500m ²	道路拡幅 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 六条二坊 三町・六町跡	都城跡	弥生時代 ～古墳時代	流路、溝、土坑	土器、土師器、須恵器		平安時代前期の新旧2時期の建物配置を検出した。建物廃絶に伴う埋納遺構を多数検出した。町内に開かれた南北・東西方向の小径を検出した。平安時代末から鎌倉時代初頭整地層を検出した。		
		平安時代	溝、落ち込み、土坑、柱穴、掘立柱建物、通路	土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、金属製品、石製品、木製品				
		中世以降	整地層、耕作溝	土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、銭貨、石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-14
平安京右京六条二坊三・六町跡

発行日 2008年3月19日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961